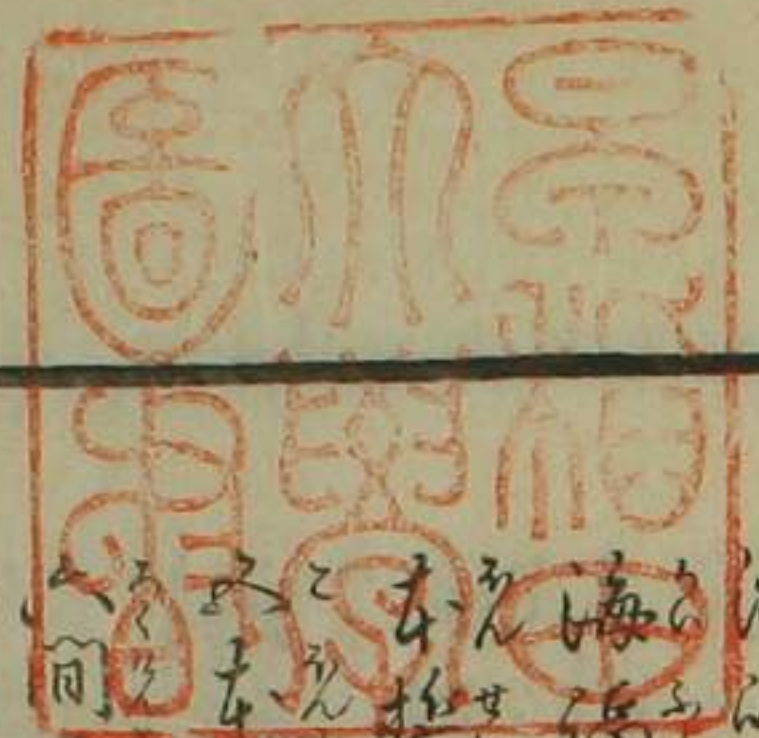






特



江戸名所圖會卷之七

揺光之部 目録

富賀岡八幡宮
洲崎安成天
海福寺
本誓寺
小松寺
神明宮
日向院
猿江泉養寺蓮
三所堂
福徳所
八月十八日祭礼
永代観世音
日先社
漢門
兵部司
永戸邑道祖神
外新梅
入林の文
芭蕉庵舊址
一之橋辨紋天網
源八幡宮
法華寺
淨心寺
靈雲院
六日羅漢寺
永戸天満宮
普門院
入林の文
陽嶺
靈藏寺
芭蕉庵舊址
一之橋辨紋天網



東覚寺 社務所

香取太神宮

寶蓮寺

常光寺 六阿彌陀六番目

延慶太子堂

慈光院

吾孀權現社

押上最教寺

蒙古退治日九龍曼荼羅起首

柳崎妙見堂

法恩寺 番神堂

大法寺 番神堂

靈山寺 番神堂

中郷八幡宮

第六天祠

多田藥師堂

業平天神社

最勝寺

牛馬神の宮

太子堂

大川橋の圖

三圍稻荷社

牛馬王子權現社

寺崎蓮華寺

長命寺 牛馬王子天長命の推

請地秋葉權現寺

須田の河系

梅若丸塚

白鷺神社

隅田河

本母寺 梅若丸王

隅田河堤

隅田の宿

都多

本母寺 梅若丸王

梅若丸塚

庵邊

内川

後瀬川

丹頂池

牛田藥師堂

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

沼江稲光寺

清重稻荷社

圓座天満文

葛西花田村

本下川藥師堂

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

平井聖天宮

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

普賢寺

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

一の江妙音寺

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

今井渡

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

新宿渡

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

本田稻荷社

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

小弓曹子墓

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

新徳八幡宮

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

神明宮

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

神明宮

若宮八幡宮

圓座天満文

葛西花田村

長崎湊

市河城址

國府臺

玉府城址

鏡石

美富浦

真弓雄橋

葛飾八幡文

安房湊神社

妙正池

勝呂田池

同進電圖

新利根川

根本橋

全光明寺

持玉坂

美富浦

真弓雄橋

八幡不知森

正中山法華經寺

妙正大明神祠

洗川

甲宮

迦羅崎起瀬

總寧寺

同古戰場

真同入江

美富の井

葛谷妙見寺

葛飾神社

安房湊神社

妙正池

勝呂田池

圓光大師清沙堂

市河渡

鐘ヶ淵

同梅

同古山

真同入江

美富の井

葛谷妙見寺

葛飾神社

安房湊神社

妙正池

意富神社初詣座地

天道念佛

九月廿日祭禮圖

夏見厨

慈雲寺

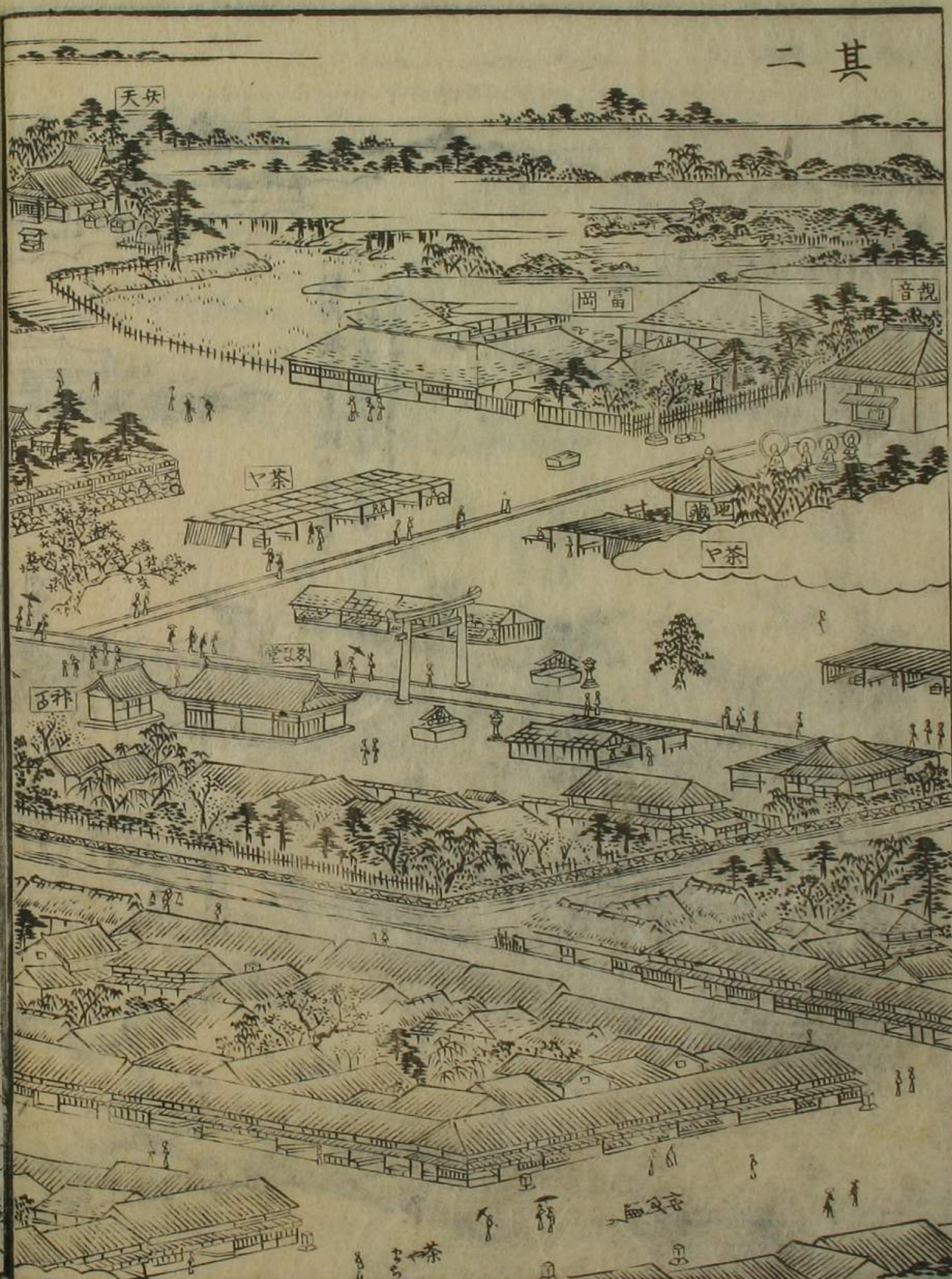
茂侶神社

新橋

意富神社

社内柏戸多かり申すも
二軒茶屋と云ふ所の
こゝ一名あり

六波羅
み本橋
茶
その
本宮
門表
三の鳥居

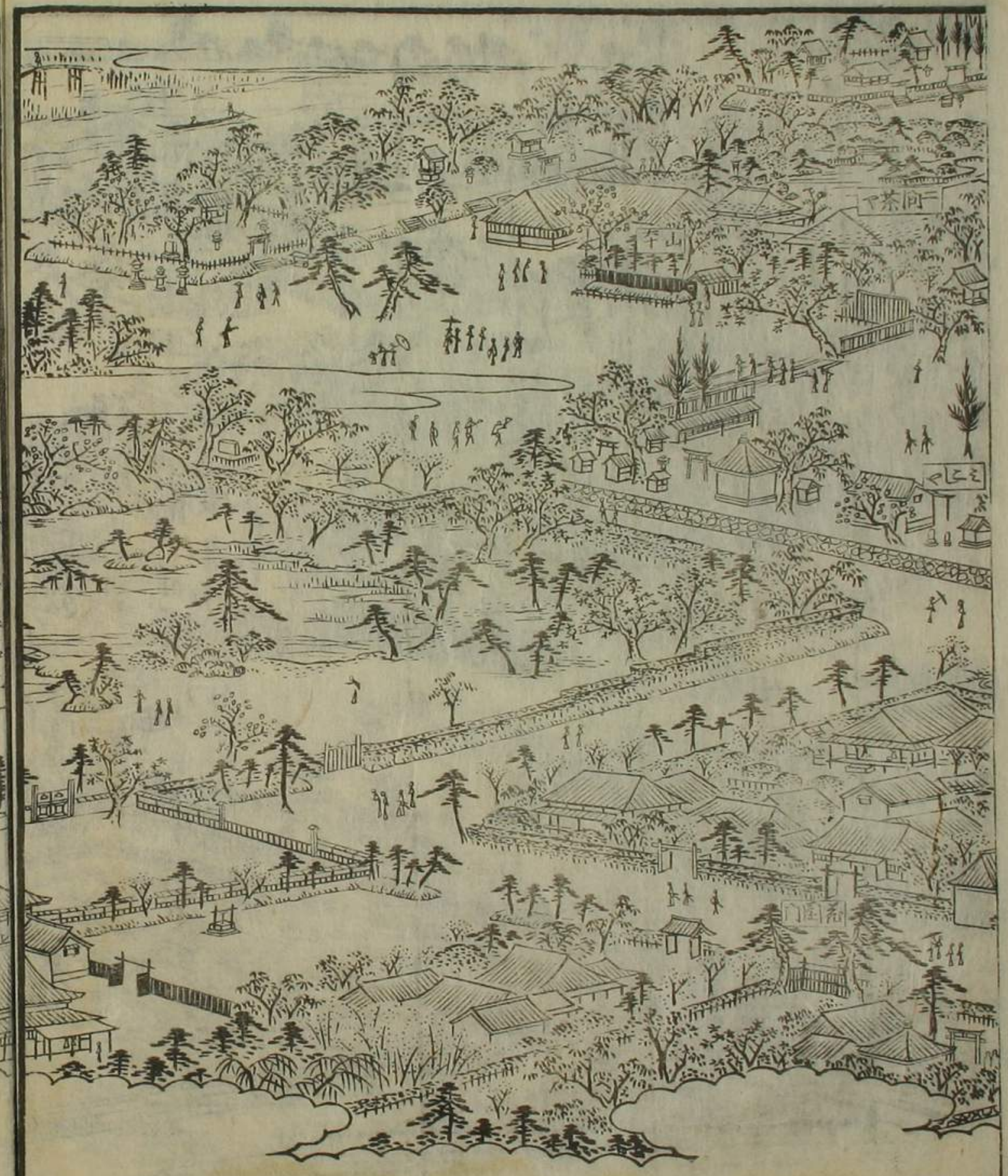


其二



三其

五
とれ
い
を
う
と
仁
和
寺
宮



富岡八幡宮 深川永代嶋より別當の真言宗より大栄山金剛

神院永代寺と號す 江戸名不記に寛永五年の夏弘法大師の霊示あるより

一夏九旬の間法流あり列々弘法大師の御影堂を建て真言三密の秘蹟を講じられり以後

本社 祭神 應神天皇 神影ハあひえ 右天照大神宮 三座

相傳往古源三位頼政當社八幡宮の神像を尊信を其後千葉家

及ひ足利將軍尊氏公鎌倉の公方基氏又官領上杉等の家より傳へ

太田道灌崇致殊に厚ありり道灌没すふの後ハ神像の所在も定

あらばそ一寛永年間長盛法印靈示よりり感得を 今尚社より

東の方砂村の海濱より八幡宮と 依此地に當社を創建せしといふものあり

華構の饒ふなりを唯茅茨の宮をあるとのを然る小大社國生駒山

の岡基寶山師正保三年丙戌永代寺周光阿闍梨の法弟より寛文

四年の頃靈夢を感じ宮社を経営を日ありとて落成し結搆

備へるありありと以降神光日々新なり河東第一の宮居と

るより當社の額に八幡宮と書きたるハ青蓮院宮尊證法親王の

真蹟あり社内末社多し依悉く是を畧す

當社四隅鎮守 艮隅 蛭子宮 川原町の 巽隅 荒神宮 入取町の道の傍に

坤隅 摩利支天宮 永代寺門前の 乾隅 大勝金剛宮 日野町の

園女樓 永代寺林泉のちよりあり 今ハ徳年間に遷されしといひ

二華表 惣門のちよりあり 今ハ柱に銘文を刻き此文ハ嶋嶋氏撰するなり

富賀岡八幡神祠石華表銘並序 建富岡八幡祠石華表銘並序

維著雍敦八幡祠石華表銘並序 建富岡八幡祠石華表銘並序

間稱焉石以幡祠石華表銘並序 建富岡八幡祠石華表銘並序

鳳蓋此舉也欽所木備不朽也厥石取諸相之土肥山 建富岡八幡祠石華表銘並序

由中而文之況鳳御聞之采蕙可歸風之叙厥載勒石柱 建富岡八幡祠石華表銘並序

人載上之況鳳御聞之采蕙可歸風之叙厥載勒石柱 建富岡八幡祠石華表銘並序

銘以繫尤柱亦其所需也 建富岡八幡祠石華表銘並序

銘昔應神帝真協天 建富岡八幡祠石華表銘並序

威需顯赫奕世且千 建富岡八幡祠石華表銘並序

敦忠祇肅神磐之祠前 建富岡八幡祠石華表銘並序

幽宮陰陽福釐永年 建富岡八幡祠石華表銘並序

元文戊午夏五月

東都中秘書監源鳳卿子陽甫撰
得水赤井啟拜書

山岡 毎年三月廿一日弘法大師の御影供を遊行と此日より同廿八日ゆく尚社列為永代寺の林泉
糸禮 開年八月十五日弘法大師の御影供を遊行と此日神樂三基本所一の櫓の南藏舟浦の前ある行祠（神幸同日
記）より寺より寺へ慶安四年の秋天下泰平の御待の相列鎌倉鶴岡八幡宮の法式を模し
尚社より流簡馬をよりむたはる假屋敷敷敷をよりむたはる見物を貴沙市をよりむたはる同書
こえより後草の二十三間をよりむたはる見物を貴沙市をよりむたはる同書
あらん秋

當社門前一華表より内二四所り間ハ西側茶肆酒肉店軒を並へて常小
絃哥のあり絶と殊又社頭より二軒茶屋と称する貨食屋杯あり
遊客絶と牡蠣蜆花蛤鰻鰺魚の類ひを此地の名産とせり

二十二間堂 同所よりあり東の方より相傳寛永年間 或人云九年 大江戸
の弓師備後といふ者射御誓古の為京師蓮華王院を模し二十三
間堂を創立せん事を乞依後草よりいいて地を賜ひ諸方より勧進
る建立の功を募るる小於く同十九年壬午十月普請落成と



永代寺山元

毎年三月廿一日より
同廿八日迄のうちに
林泉をひいて
諸人より募る





其二

の四ノと今夫時と云ふは三十三間堂の旧名なりと云ふは
 今の町名と云ふは俗間堂前と唱ふるも三十三間堂の略名なり
 田録の字に罹る灰燼より其後今の此より移されたりと云ふ

江戸三十三間堂夫数帳又慈眼大師の發起ありとあり又一説ふむ
 流の武上これを建ち江戸神樹の連々松葉と云ふかをそりてありと云ふ

辨財天女 同所東の方 洲崎あり列當を吉祥院と号す本尊

辨財天女の像ハ弘法大師の作といひ相傳元禄年間深津氏正隆

台命を奉へ八幡宮より東の方の海濱を築き立り陸地とて依同

十三年庚辰護持院の大僧正隆光 河迎氏此此天女の宮居を建立と

をありと

此地ハ海濱あり佳景あり殊更弥生の潮盡まり都下の貴族袖を連

る真砂の文蛤を撿り又ハ接舩を浮り妓婦の後歌より其催

さもありと春色を添ふの一奇觀なり又冬月千鳥おも名をけり

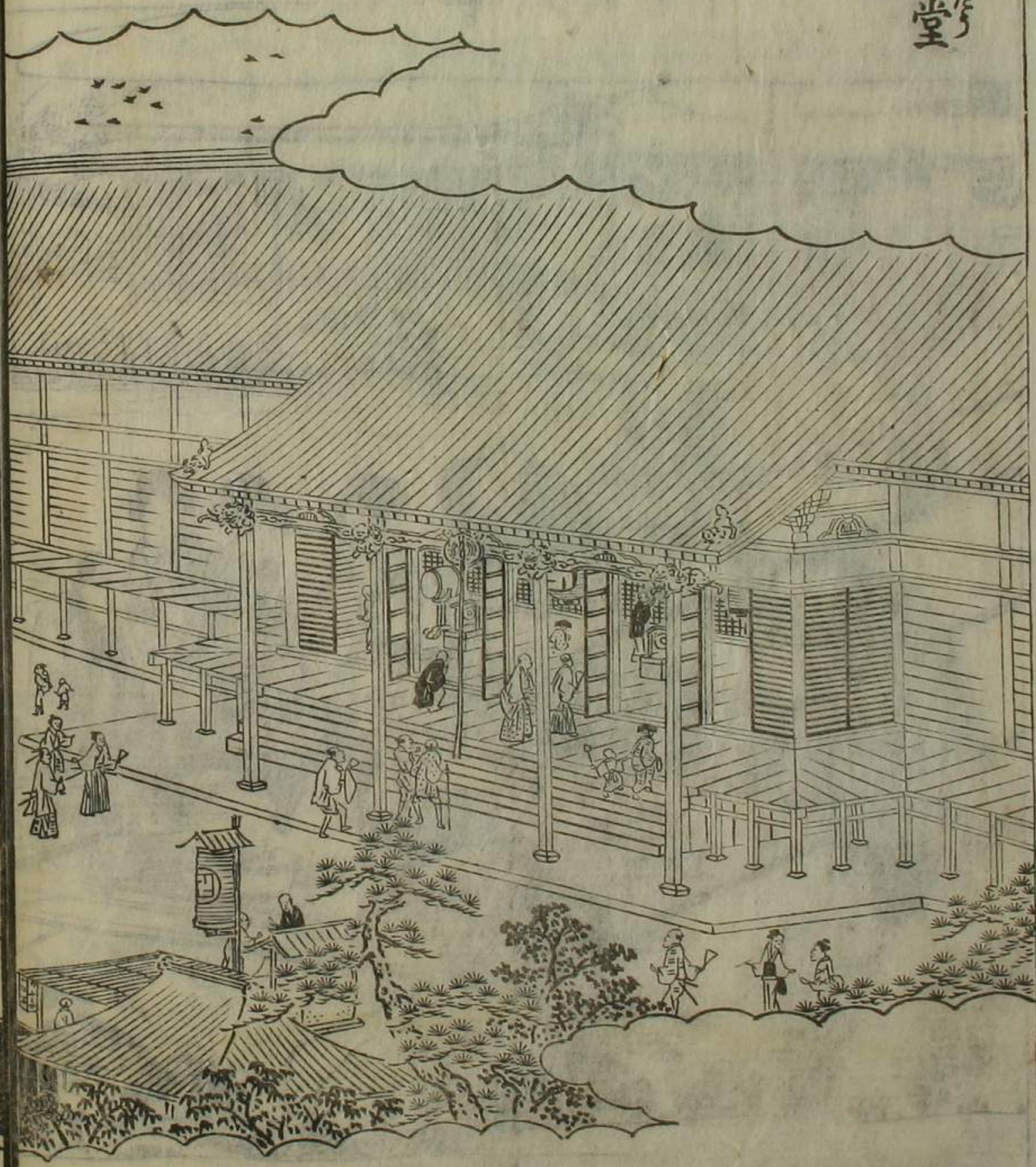
長光山陽藏寺 深川富岡橋の北結横小路あり妙公寺沘の禪宗

一々本尊觀音大士の像ハ惠公僧都の作ありと云向井氏忠務用

二軒茶屋
 雪中遊宴之景
 此の茶屋は、雪の日に遊宴する所なり。客は多く、茶の湯も熱く、酒も佳し。雪の景色は、白く静けなり。客は、茶を飲み、酒を飲み、雪の景色を眺め、楽しむ。

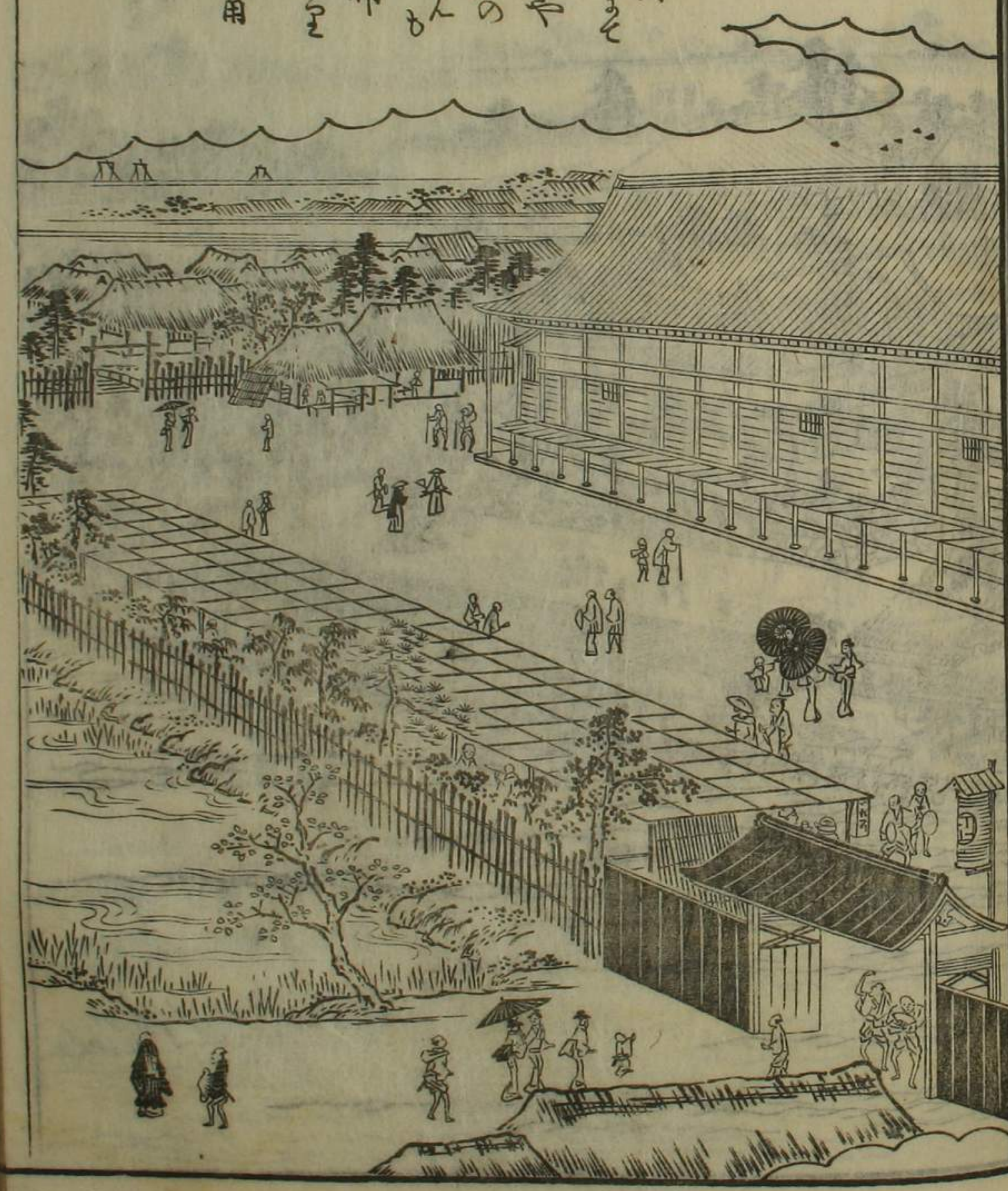


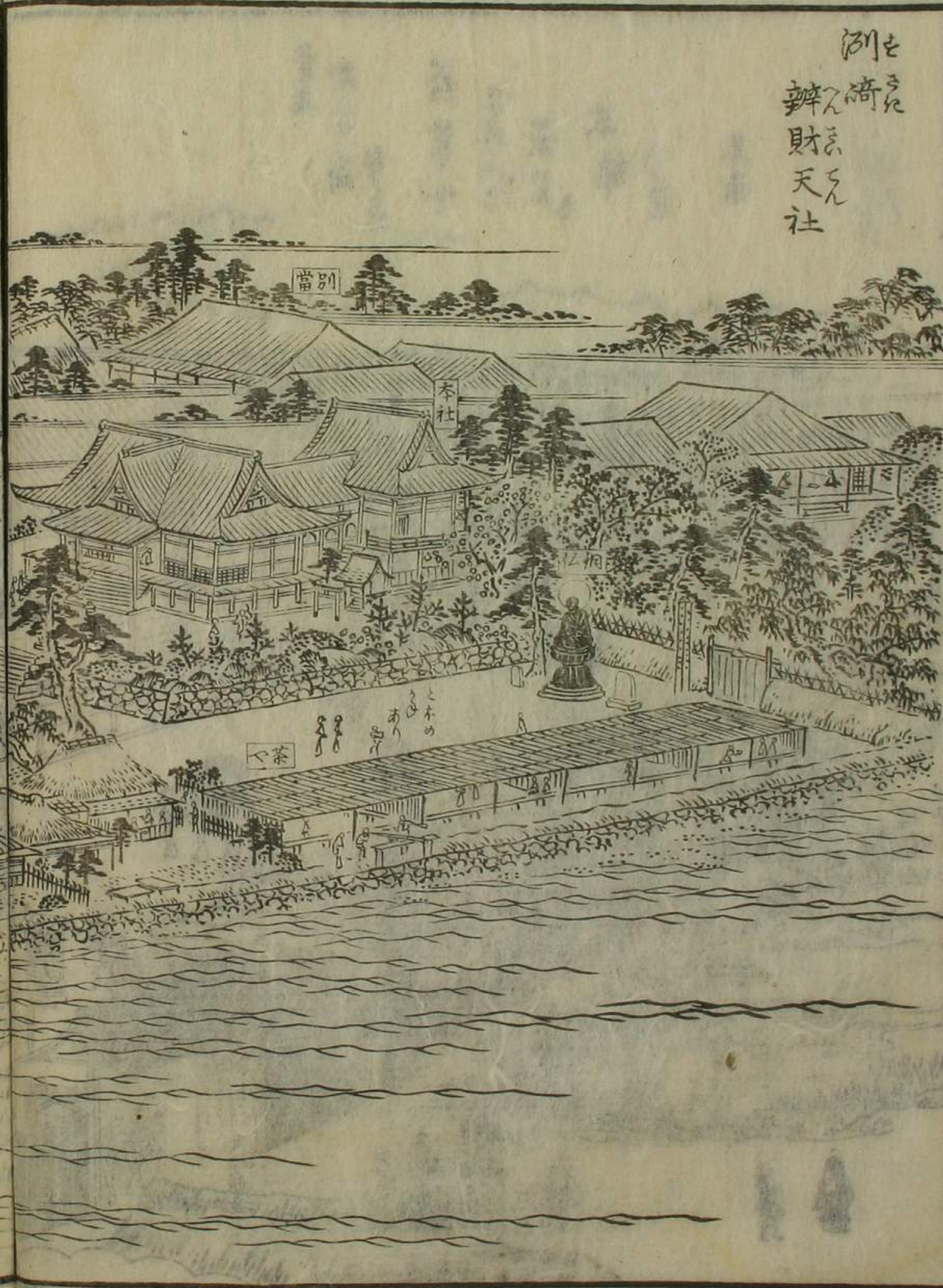
まんぶんかん
三十三間堂



九え集
新三十三間
堂

若草や
そのみの
葉も
本綿
うも
其角





別
崎
財
天
社

砂村
富岡元八幡宮

洲崎 弁天
十八丁の東
の海濱の
深川八幡宮の
旧地ありと
いふ

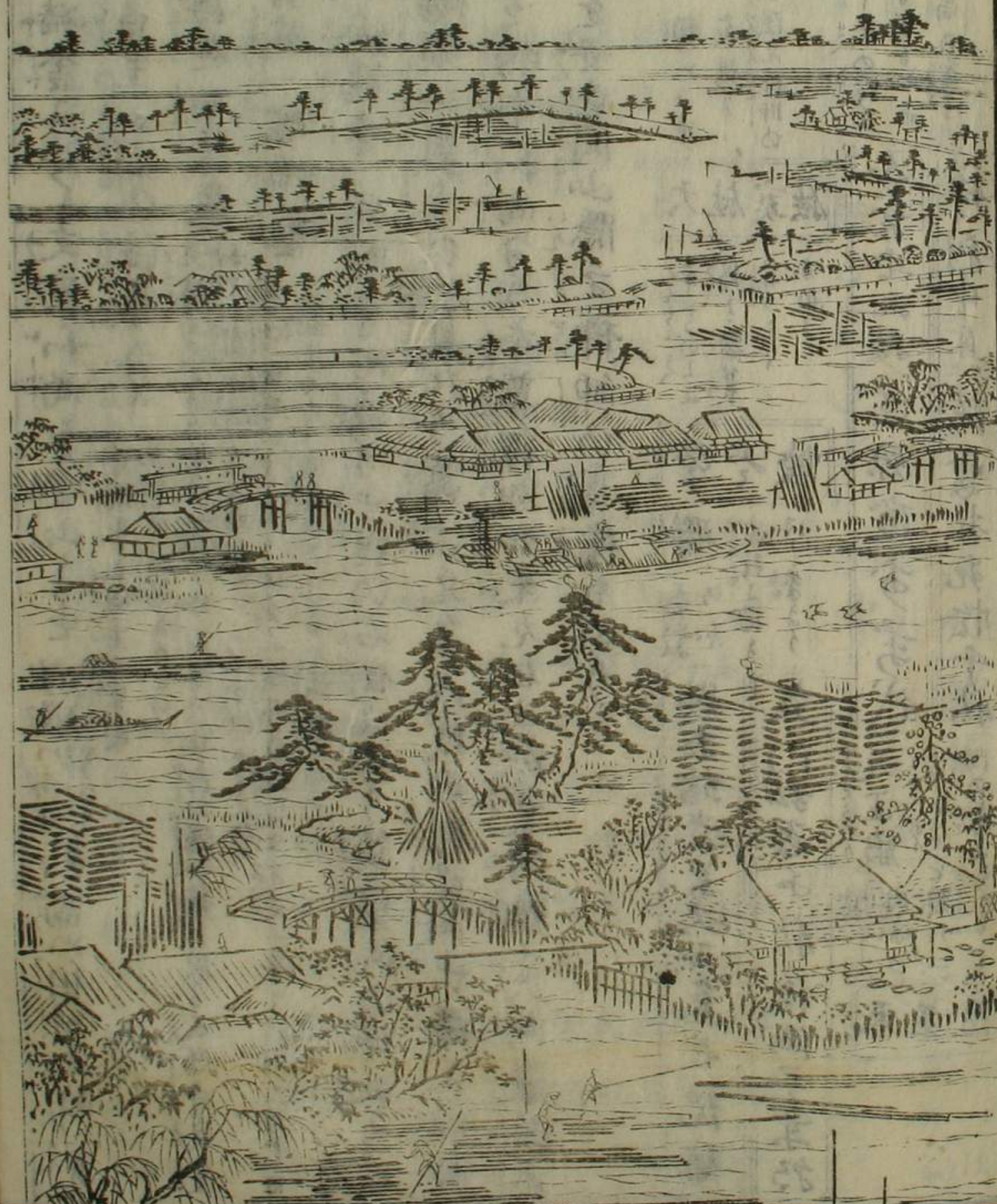
此
多
夫
竹



深川
木場



松島
菜の
む
さ
あ
わ
し
宗瑞



桃寺白室和尚の法弟なり
見桃寺も領主向井氏
布衣の道場ありといふ
平内二馬云々とある人爲寺文室

二代目英一蝶墳墓
當寺 卵塔の中より碑面又極外道輪信士元文二年丁巳臘十二月十三
と記してあり通稱は長八をい信勝といふ

永壽山海福寺 同所寺町通り中程の右側よりあり黄檗派の禅林なり

江戸鰐頭二箇寺の一負なり萬治元年戌戌の創建山隠元禪師

中興之獨本和尚より本尊釋迦如来左右に迦葉阿難十六阿羅漢本

の像を安と用山隠え禪師の肖像もあり

佛殿
額ハ二重

大旌奕旌

卷之六

妙在端素筆大玉毫長現瑞

蘇門弘歷子秋穠海亭某朝

聯れん
 日一氣のむす
 掲ある尚はる七しち

金匱要略六叔道彌隆步萬代

天王殿
内
帝
の

天王殿

聯れん
左さ右うの
あれ

大鵬の筆

陳國衣民風高而清明
降魔捕正法遂久以安寧

鐘樓 殿の
天正
石あり天
木尚の糸あり

樓 鐘

花鯨の流文の流
え禪侶の撰と云ふ
なり
其文たのこころ

當山洪鐘者寬文壬子年石川政勝个佳居士捐之

也時天和二年壬戌之冬劫火俄起炎燎殿宇巨壘

等者同氏思失先亡之卒願忻然鳩金重新造焉
及乎竣工知事來乞銘遂再舉此以鐫其上銘曰

大洪
化音
燼燎
內嘍
一醒
火覺
鑄群
生成
中禪
虛林
而令
寂振
有地
扣兩
則業
鳴輕

返聞自性寂寂惺惺壽源綿衍福海澄清
化風永扇家國昇平覺王聲教大矣難名

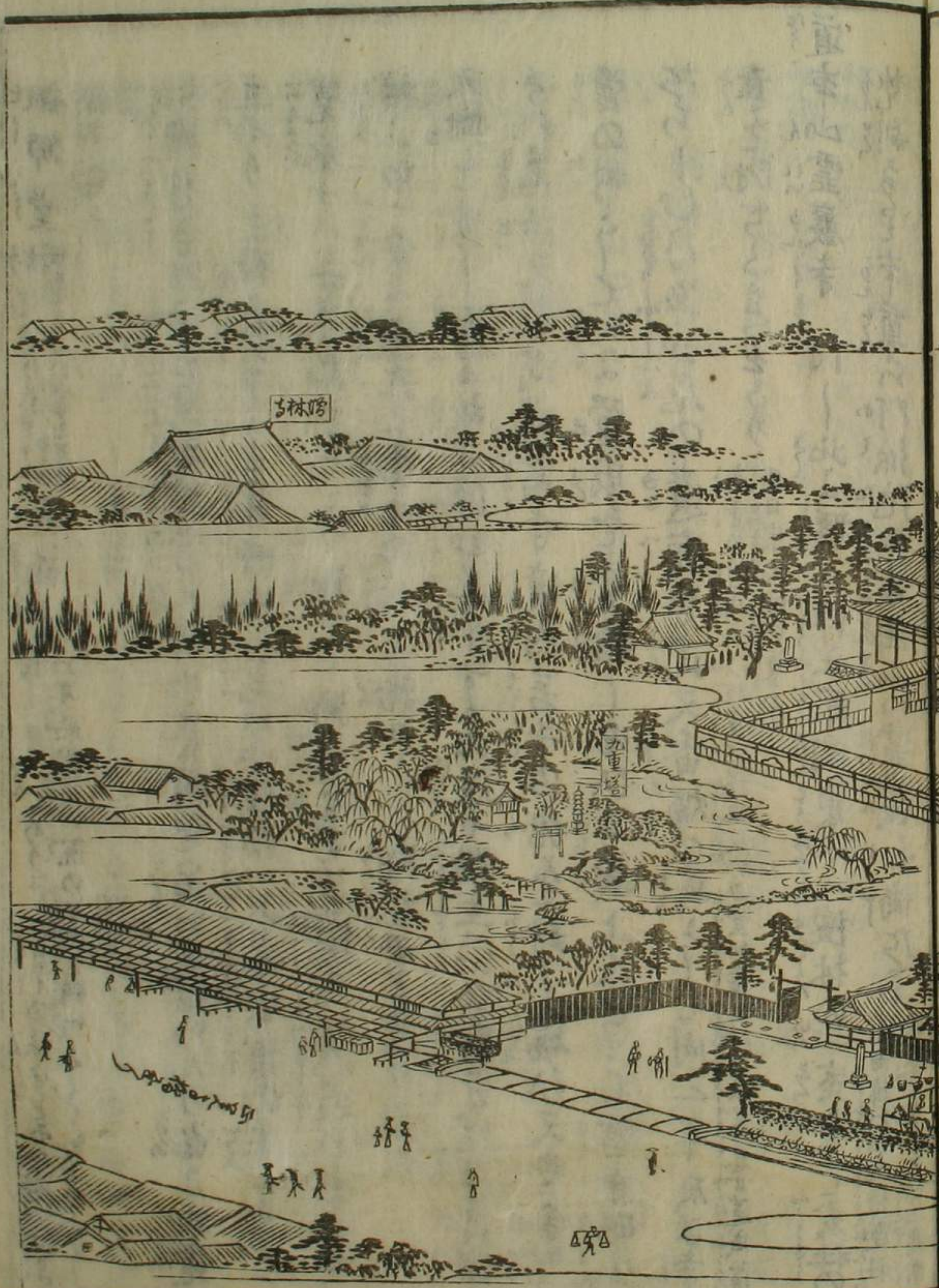
開山八十翁隱元珩謹題

永壽山滄福禪寺住持沙門獨本源和南謹識

檀主
石川氏
正茂
正之
台工氏列工石居主中村喜兵衛藤原正次

一、武家
二、武士
三、武士
四、武士
五、武士
六、武士
七、武士
八、武士
九、武士
十、武士

九層塔
寺壇沈のちとて、（？）より魚一丈、（？）の石の身なり、（？）に、（？）武田作す
りのありとひく土屋氏某これを持付く、（？）のあきへは、（？）建るといふ



海福寺
 武田信玄の
 持てた
 石の塔
 臺基
 堂前池の
 傍に
 のぞ

祖師堂 本堂の左にあり 七面堂 月堂前より三層の塔宇とあり此七面堂の

相傳當寺の淨公院殿妙秀大師の菩提を弔いせめり

相傳當寺の淨公院殿妙秀大師の菩提を弔いせめり

立あり精舎ありと當時淨公尼の小堀正一入道宗甫の妾あり

寛永十八年辛巳 大樹 御誕生あり頃正一入道の忠公を

補ふの一分は備んと春日の局は執事 御乳母とあり

大樹を育つなり故に淨公尼來するの後も猶生前の勤勞を思召出

され萬治元年戌戌當寺境内若干の地を封じ錫ひ又堂舎經

堂の料として大に負財を喜捨しぬ日義上人をして當寺尼山

たらむ乃淨公尼の遺廟を建又香燭の料として同二年庚子寺

産を附せり

道奉山靈巖寺 一北に隣る淨土宗東十八檀林の一室より宏社の

梵刹あり奉尊の阿弥陀如来開山の靈巖和尚と

傳は里見氏南條小糸の産より三郡内縣龍寺の岩所の室に入られ其後明神

天の靈體の英く寛永十八年九月一日心藏と號し八十五又淨土傳燈系図に南條

法嗣ありと和尚創の精舎を當寺あり收養しつゝ依是を略せ

寺産を附せり寮舎僧坊を連ねて巍然たる正え坊を造立

せ銅像の地をその大江戸六地所の一負あり総門の内正面は

對し毎歲四月朔日より同十日まで阿弥陀經千部讀誦修行あり

ゆへ道俗群請せり

相傳寛永年間當寺開山靈巖和尚或曰大江戸の東諸を顧て侍

者謂て云く我大藍を此地に建じ侍者の云く江潮浪高く鉢

盂底空し爭巨楹願梁を架せん師笑云く俟夫日あらん於是師

化疏を筆し諸檀中を勸勵し一簣毎二十念して願譜に結縁す

り故に四輩競廉廣汀日あらん陸地とあり

成て梵刹を創し靈巖寺と号せり

爾法幢盛に起て五百の義龍恒に蟠る妙は河山和尚の世

明曆丁酉の回録は罹る悉灰燼とあるの後今の地は移

るなり其頃今の地も海濱なりて輒寺院構営ありて

なり成阿碩和尚阿山和尚の弟ありて十方勧進して地を築固り諸

堂殿建立せりなり

當知山本誓寺 重願院と号と同通り向例あり浄土宗江戸四

箇寺の一負なり唐佛の阿弥陀如来を本尊とす

相傳此本尊の相別小田原の漁者其名をききまう魚網を沈く彼地の海中

小得て後靈示なり也當寺は安しなりとて寺を往古小田原

ありて傳蓮社曜誓西回和尚西回阿弥陀如来を本尊とす創建し藤枝氏開基の

浄舎ありなり文禄四年丁未 嚴命は依寺を大江戸に移す

貞蓮社大誓上人文賀和尚中興の開祖とある

其後馬喰町の辺に地を賜ひて

水戸中納言頼房卿の浄母堂英勝院殿當寺を修造なり

此藏尊石像

一蝶寺 同所東の方海辺新田穀の内あり京師妙心寺流の禪

宗蒼龍山宣雲寺と号と元禄七年甲戌創建の林圀より卓禪

和尚閑山たり英一蝶翁曾當寺に寓居す其頃の遊とて佛殿僧房

等の屏障悉く翁の畫なり故に世俗一蝶寺と号と

日蓮山法禪寺 同所南の小路あり浄土宗より京師知恩院に属す

本寺阿弥陀如来の像の佛工安阿弥の作あり

菩薩の像の雲中より羅列し常に行者を護念し湯小川の畔に

を撰擬す興院と稱するも極楽上品上生の辨相あり閑山は長蓮社英譽

阿上人と号と慶長七年九月濃列惠那郡稻塚の住人格性伊賀氏

小く三郎五郎則俊と号と伊賀左衛門佐則吉の弘治元年乙卯稻塚

一城を築き江田の城と号けりといふ居住と
筑後守の旗本たりし永禄二年織田家信長の

後山家にて駿別に至る中嶋と云はれ閑居をせしめ多良庵
と号け雲碩と改めて浄業を修行しりる多良庵と云

御打入の頃道德殊勝の寺あり城取大江戸より品川をひて寺
境を賜ふ今馬場其後文禄二年癸巳道三河岸移され又柳屋

地を留せられたりしり後天和二年に至りて今の地より移る
其間倒るる今も正月三日月の宵の鉦鼓を鳴させしと云

龍徳山雲光院 光嚴教寺と号て同所西隣る浄土宗江戸四箇
寺の一あり本尊阿彌陀如來の像の京師東山獅子谷忍叡上人

の作といふ閑山の還蓮社往來上人潮吞和尚と号と
甲別武田家の臣飯田流後者の孫同久太衛門某の女ありて

本願阿茶局あり 後後別今川氏義元の士神尾孫玄満久室の室と云
同形勢少輔局の 大將軍家泥近の侍女ありて元和六年庚午

女御 入内の時供奉の功より後一位に叙せらる當寺創開の
初も黄金二枚をとり堂材をとり賜ふ

と号せしり押象堤の南あり頃和尚寺と光嚴寺と号せり
天和二年田録の出来あり依ある一二年今の地より移る

額 後水尾帝の勅を奉りて良慈法親皇筆を添られしと
昔の幸堂と掲る今い

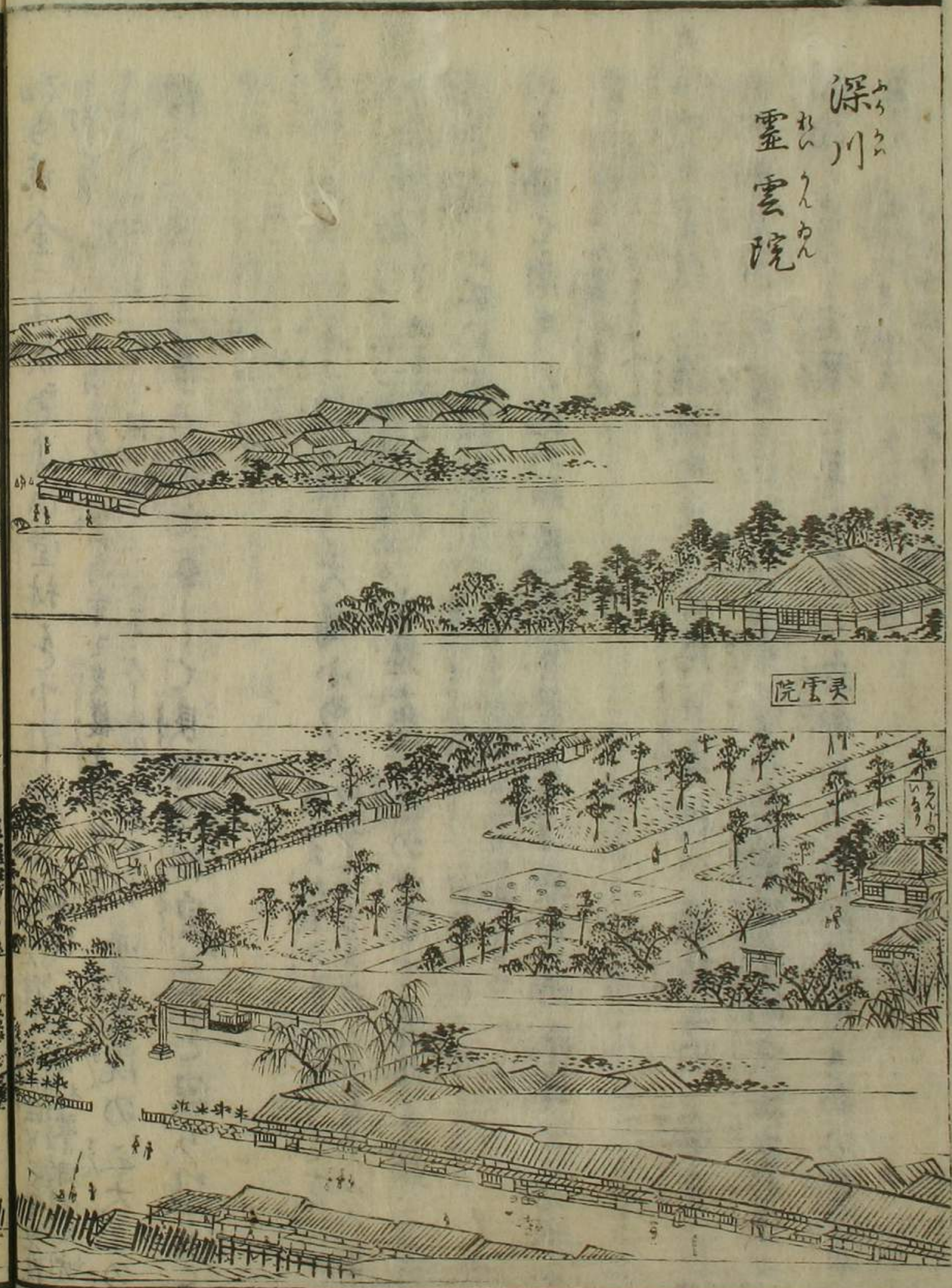
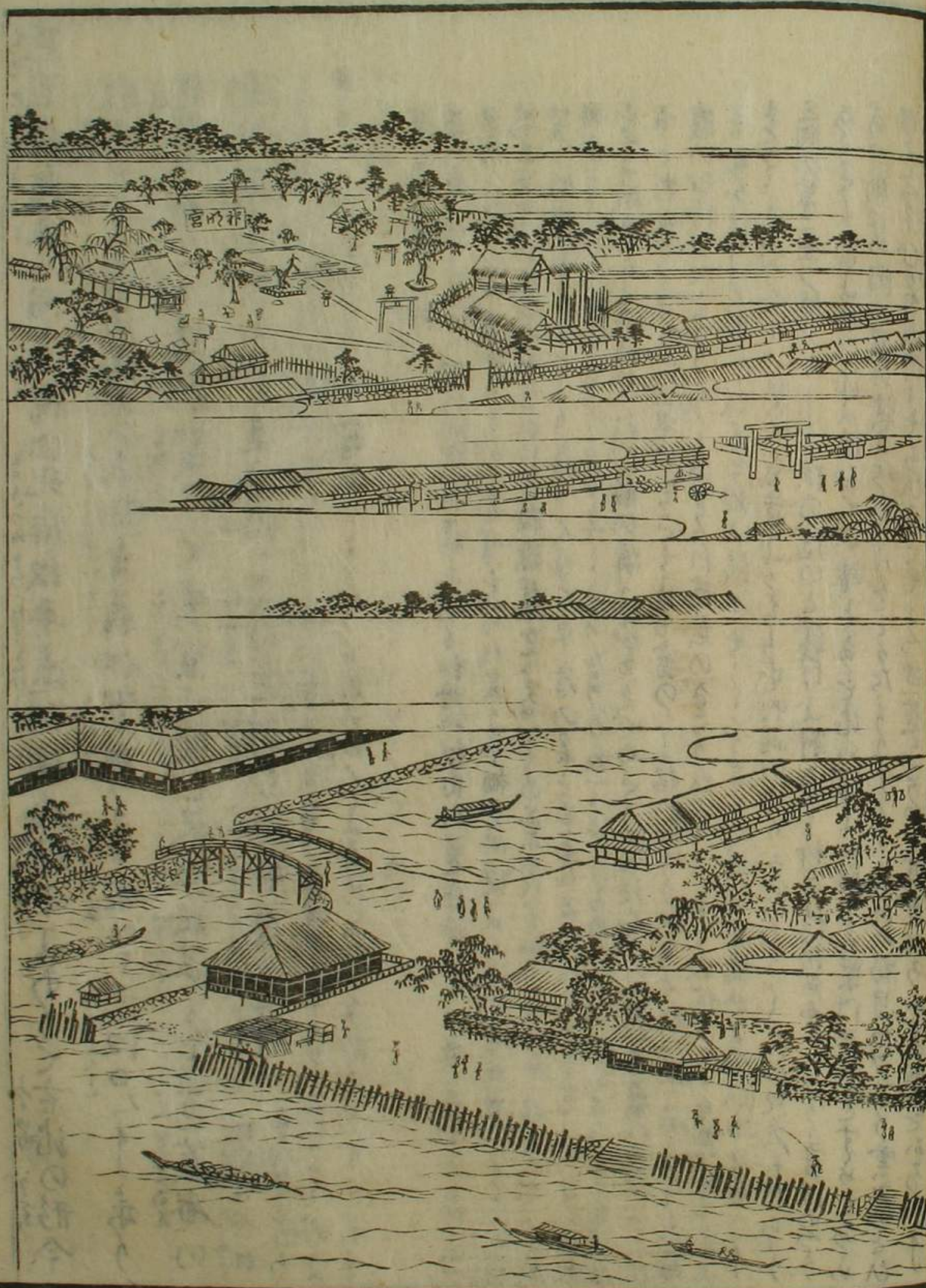
五本松 同所小名木川通り大嶋小あり
或人云四名女木と云るありと云れ江戸

面を無傷ふ所の古松をいふ 九鬼家の構の中より道路を越て水
川を隔て南岸の地い知恩院宮尊室法親皇御幽棲の舊跡と

天王山雲雲院 清澄所大川の傍万年橋の南端より禪宗にて
武別越生の龍穩寺と属と本尊の聖觀世音阿彌陀放光の東明

和尚と号く宝曆七年丁巳 台命あり依創建する所の蘭若
あり

同基の年歴久しれりゆらるるを
りて此俗流川の新寺と稱ふ



深川
靈雲院

院雲靈

芭蕉庵舊址 同 檜の北結松平遠列候の庭中よりありて古池の形今

猶存なりとの延室の末桃青翁伊賀國より始り大江戸よりあり

秋風り家より入後刺髪して素宣と改む又秋風子とて芭蕉庵の

号を譲請夫より後此地より居を結ひ泊船堂と号す

といふ江戸小田原町の奥牙より一頃餘の地を有る後此地をとりて生祠を

興もあらず水面より草覆ひより古池の如くありて又古池のほとけあり

芭蕉を為と詩

菊の東籬より竹の北窓より牡丹の紅白の是非ありて芭蕉よりさる詩人の

平地より水清なりされば花の咲きしる年より芭蕉よりさる詩人の

風を芭蕉のやうなやうなひけん枝葉をさる年より芭蕉よりさる詩人の

置る草葉もあつてさる年より芭蕉よりさる詩人の

根をさる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

さる年より芭蕉よりさる詩人の

神明宮 月所森下所よりあり猿江の泉養寺別當たり

天合宗東庵の

又馬の記よりあり

芭蕉庵の記よりあり

芭蕉庵の記よりあり

芭蕉庵の記よりあり

芭蕉庵

古比や

花 桂

の

音

桃青



萬曆十三年九月十三日、舊式の祭紀あり

是を歩射と號く相傳ふ昔此地岡創の里正深川八郎右衛門某

宅地、伊勢兩皇太神宮を勧請するあり泉養寺の岡山秀須法

印を奉祀せしむとのみ此の深川氏宅地の同なりといふ

泉養寺記、深川の起立の事、其畧を云く深川の地、往古より

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

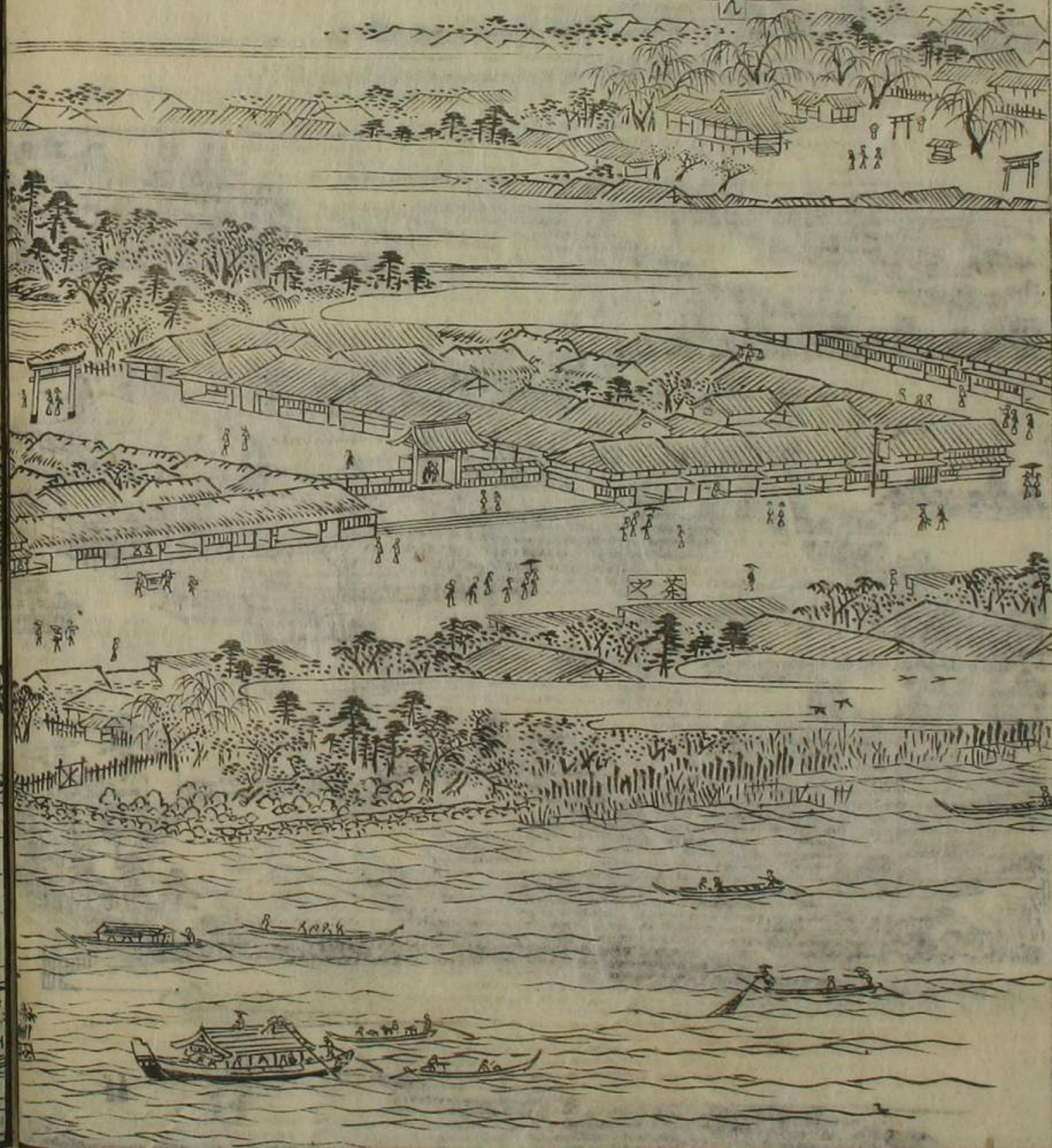
其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

其頃、別名を云く深川八郎右衛門某と稱するあり、此地は、

本所
彌勒寺



本不一目
 辨財天社
 深川八幡御後和



の後此處へ移されたり毎月八日十二日を祭日とす（祭日多し）

深川八幡宮御後所 大川端大船倉の前より富賀岡八幡宮祭

禮の砌ハ神惠此處へ流らせり

辨財天社 同所一の橋の南の結あり奈所相別に鳩（同）え禄

の始惣檢校叔山氏勸請と己巳の日祭請多し

志天に於てあるを欲し七日の宮飲食を斷て相別に鳩あり（天女岩）奈所

至り其の祈請を果して靈驗ありと云ひ竟て滅却（如）を祈り（如）に祈り

松山流との小慶安の頂 台金を並べ置置中に流れ泥迫と云祿のち今（の）の祿二四

を揚ひ警衆の總縁とありめられり（と）あり（と）京所より清要者の此をたををい

一流の親相はり毎年二月十六日十九日ハ警者宝就と集會して琵琶を彈（平曲）と

國豊山同向院 西國橋の東結あり

称念上人の遺風ゆゑ捨世一流の佛域たり明曆二年丁酉の春大

の時焼死の革の冥魂返福のため毎年七月七日大絶賊鬼法會を

後行と又ハ八日佛餉施への檀主現當西益の法あり（總門の額）

又國豊山とあり縁山定月和尚の筆あり

本堂 本尊阿彌陀如來座像壹大許あり

桐の門内位階ありある者世觀上人秘鑑和尚の今（の）の筆を造りて堂あり

不の烟像の清形をりて堂あり今（の）の筆の此ありと云二年四縁の後ある

第三世觀音和尚の 備中千體阿彌陀如來 後堂より一尺一寸惠心僧都の作あり

佛堂より同體ありといふ縁山二十三世の貫首遷善貴屋上人念持仏より明曆の大焼死

弱死せる不の十萬八千餘人の名を同向のた音 命せられ其頃 官所より假の佛堂を造り

せられたりといふの靈像をするとあり同向ありと 三佛堂 本堂の右より阿彌陀如來大日

あり焼死弱死の亡魂得脱の如きとあり佛堂より建ちたまひ堂あり石塔あり其前縁を

穿死弱死の者の幽靈返福のため毎年二月十六日十九日ハ警者宝就と集會して琵琶を彈

彫られりといふの靈像をするとあり同向ありと 三佛堂 本堂の右より阿彌陀如來大日

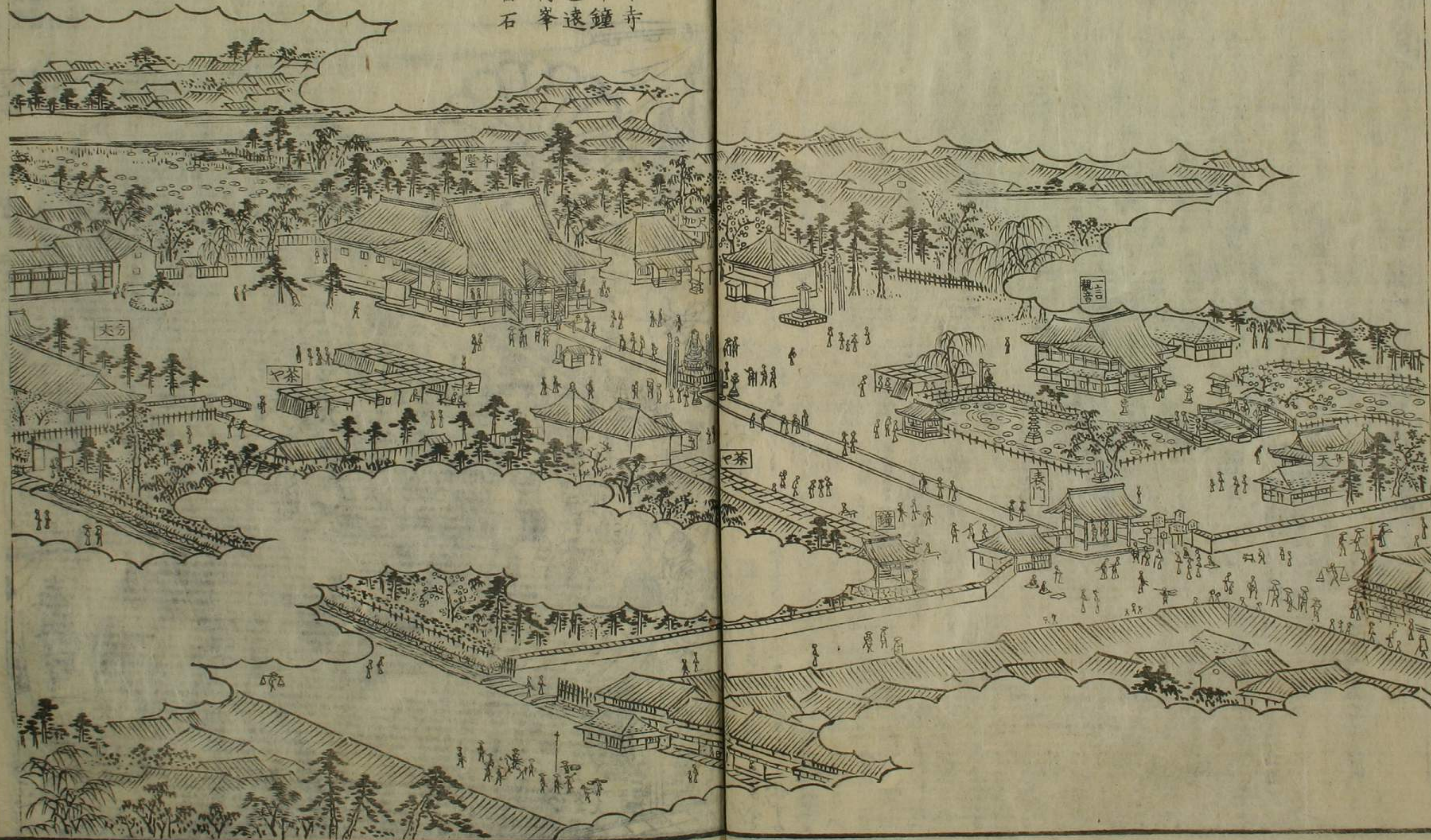
一言觀音 佛の傍より一尺一寸の觀音惠心僧都の作あり南都招提寺より遷とあり有信の

表より 辨財天祠 佛堂の右より一尺一寸の觀音惠心僧都の作あり南都招提寺より遷とあり有信の

りあり 辨財天祠 佛堂の右より一尺一寸の觀音惠心僧都の作あり南都招提寺より遷とあり有信の

回
向
院

不
見
烟
中
寺
但
聞
烟
外
鐘
江
城
秋
色
遠
落
日
隱
高
峯
白
石



諸國の聖佛聖
 神等結縁の爲
 大に戸をひら
 け合はせんと
 敬るの多うに
 尚院に於て
 修せむ候方
 うり便り
 此の故
 殊に
 多

同向院帳系
 五ノウヤノウチヤウ
 五ノウヤノウチヤウ

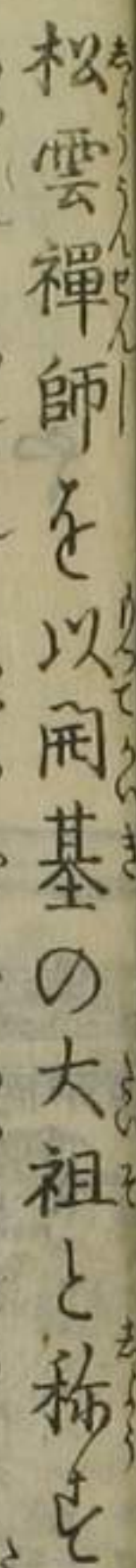


相傳明曆三年丁酉の春正月十六日大江戸大に仍る焼死する者凡
 十萬八千餘人あり時よ
 許歩の比よ件の焼死骸を埋藏しよ一堆の塚を築き號けて漏澤
 園と唱へ乃亡魂追福の爲増上寺第二十三世貴屋大和尚以下一
 字の梵刹を創基せしめらる當寺是なり
 諸宗の僧を集め一七日の同塚の布衣千部の経を讀誦せしめ
 大法會終行ありされとも住持ありし其頃小石川智香寺の信
 譽自心上人道光世に隱せりし當寺に招住せしめ第二世ありて
 閑山と稱したるの依上人彼塚上小堂宇を建營し長し幽魂の冥
 福を助むる爲不斷念佛の道場とせしめたり
 天恩山五百大阿羅漢禪寺
 本所五目堅川より南あり黄檗流の
 禪林なり河東第一の名藍たり閑山の鐵眼禪師中興の象先和尚又



猿に泉鏡寺の池に
 生すところの蓮花
 重瓣紅花ありて花
 牡丹に勢鬚たり故
 奇観とて寛政
 九年の晩夏
 この花を
 發ししより
 今に至り
 年々に
 あり

靈驗炳然として
訪人常々絶えず
来由ハ拾遺江戸
名不空余なり



長一丈六尺下は巨石を
疊かさねて坐まをまう微まく

各高八尺
阿難迦葉
各高九尺
左右の階

額くわく 本尊ほんそんの
上うへの場ば

聯れん 同堂内
左右の

丈六妙相教澤深光宏照祇園瓦地

黄檗隱元老

美法書

柱は揚々象
先の筆あり

子子生者現縹緲影影歸歸在福海雲

額う
 日ひ
 堂どう
 面めん
 内ない

著
額

二佛殿

卷之四

即ち
 に
 の
 葉

園
易
家
根

急の
せん軒の
ねおよ

時来

あり

嶮

筆あり

五百羅漢造立之末由

松雲禪師の京兆の人寛雄

7

正信を具ふ或人云く
雲人云く禪師始く

佛ぶつ工こう俗ぞく稱しょうを

寛文九年己酉

二 摸ものまへ瑞龍精舎小入て鐵眼禪師てんがんぜんし

力を清と心たじとる
あつろ
ち
ち
随ひサ羅髮一

僧とある後游方

の懐^{おもひ}のまゝより師^しの許^{もと}を辭^{はな}し

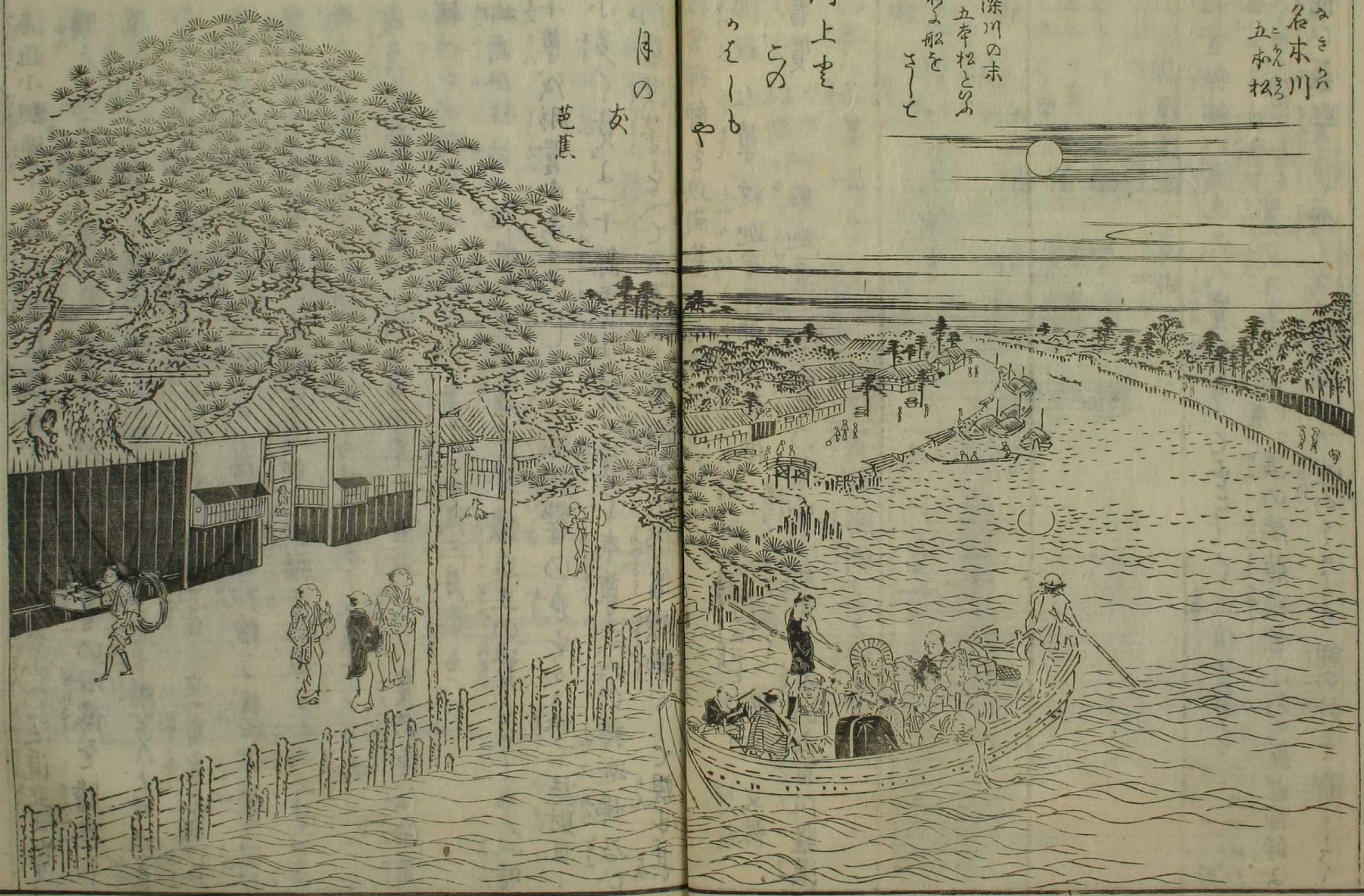
とみき
小名木川
五松

深川の末
五本松との
舟を
さして

川上を

この
わとも
や

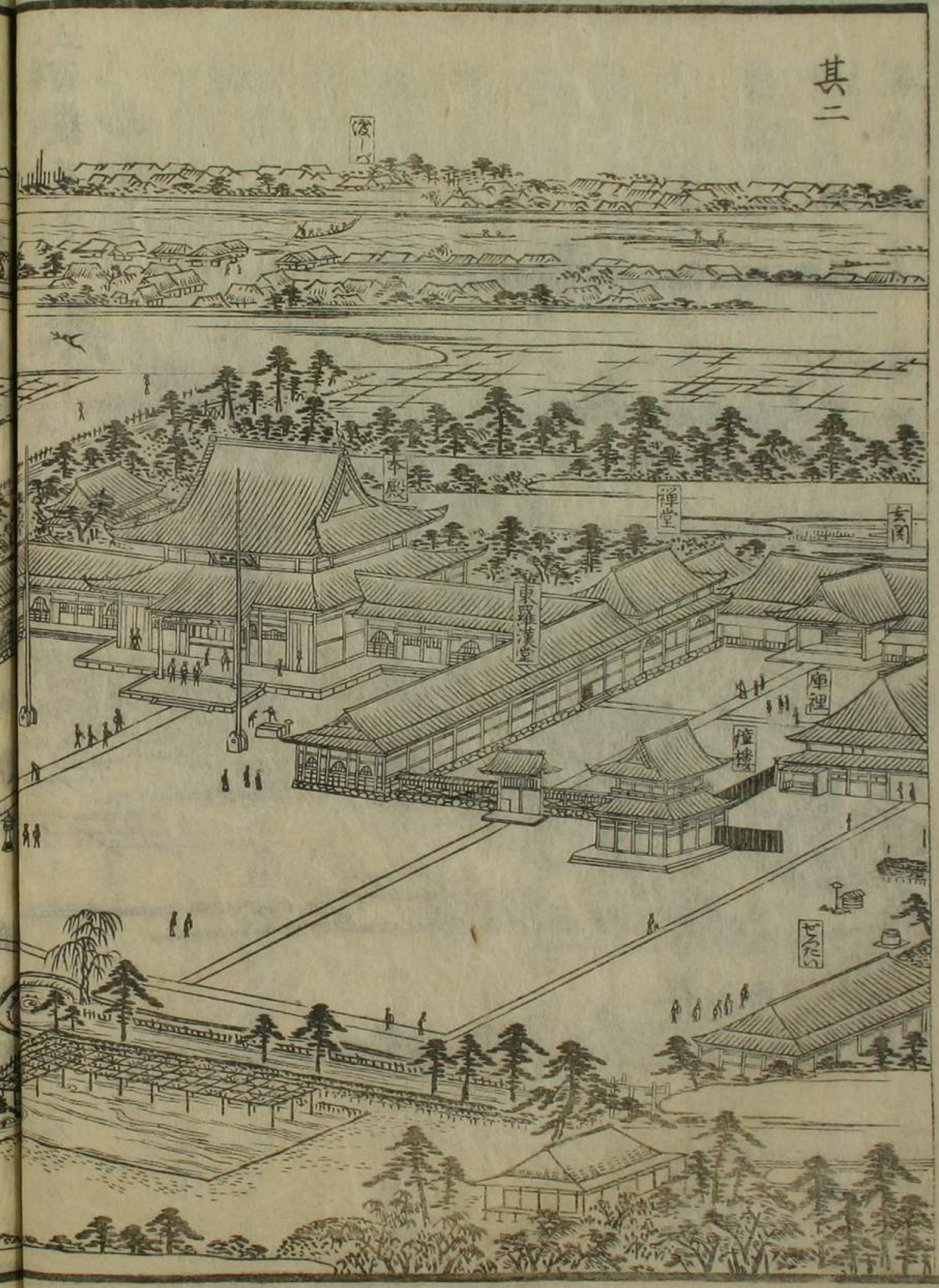
月の
あ
芭蕉



海西小飄歴一豊前國羅漢寺小至り唐土天台山の逆流並に賢
 順とつる二僧一夜に造立せしといふ五百聖者の石像を瞻禮一
 恭敬日小厚く其後漸く五百羅漢の像を手彫せんとするの意
 わり歸省の日鐵眼禪師果して其命あるを以て遂に貞享年間江戸
 小来り元禄辛未始て浅草寺の境内壽松院に就て假屋を假け
 衆人をとりめ羅漢の本像を彫刻を弘福寺の鐵牛和尚衣資を喜
 捨一尊を刻しむといふ時も至りて終あるを微くして
 歲月を歴たり然る小同壬申の年大倉前一十六頁の道俗結盟
 輔佐を癸酉孟春に至り五十尊成甲戌三月亦も
 御國母桂昌一位尼公金を賜て佛像造立の次第とありぬ此時
 十尊成彫當をあるありしより緑化響の意とる如く施財日
 小多く竟に二十餘霜を経て完く本尊丈六の釋迦佛及び
 阿羅漢等とて五百二十有餘計の佛像縹緲とて現れ其

五百羅漢寺
 三廂堂





梵相の奇古坐立の威儀儼然として生り如く其妙手常人のそと
 ころ所あり瞻禮する者として靈山一會未散の嘆めらるるは八年
 乙亥夏五月鐘の鑑又天恩山羅漢寺の号を賜ふ依假又堂宇を造立して佛像を遷
 せし同年八月黃檗高泉和尚偶東行ありて是其原を貴むの故と又其時
 又先師鐵眼和尚をて岡山祖とて是其原を貴むの故と又其時
 黃檗山の末寺とある松雲禪師其頃既伽藍建立の企ありととも
 時縁多しとて宝永七年庚寅一旦疾に罹る月を越えて起を終り
 同年秋七月十一日奄然として化せし時又歳六十有三あり
 法臘四十二年

五百大阿羅漢尊號

第一
 阿彌陀佛 須彌陀佛 阿彌陀佛 施留陀夷尊者 有賢無垢尊者
 梅檀藏王尊者 施留陀夷尊者 橋梵般慢尊者

第十一
 因陀羅得慧尊者 婆蘇槃豆尊者 法界樂尊者

第二十
 難陀羅多化尊者 佛陀難提尊者 末田底迦尊者

第二十一
 優波伽多尊者 僧迦耶舍尊者 憶持因緣尊者

第三十一
 迦那提婆尊者 莊嚴無憂尊者 憶持因緣尊者

第四十一
 毘羅羅多尊者 伐蘇密多尊者 闍提首那尊者

第五十一
 悲密世間尊者 獻花提記尊者 眼光定力尊者

第六十一
 解空無垢尊者 伏陀密多尊者 富那夜舍尊者

第七十一
 不著世間尊者 顯空第一尊者 羅度無盡尊者

第八十一
 金剛破魔尊者 牛切慧善尊者 無憂禪定尊者

第九十一
 金山覺意尊者 十切慧善尊者 梅檀德香尊者

第六十一

無業宿盡尊者

解空尊者

第七十一

瞿羅那尊者

第八十一

波那尊者

第九十一

不著尊者

第十十一

解空尊者

第十一

法藏尊者

第十二

三昧尊者

第十三

除憂尊者

第十四

雷德尊者

第十五

馬勝尊者

第十六

自淨尊者

第十七

調達尊者

第十八

寶勝尊者

第十九

寶勝尊者

第二十

明網尊者

第二十一

修光尊者

第二十二

持世尊者

第二十三

善思尊者

第二十四

法眼尊者

第二十五

直勝尊者

第二十六

無戲尊者

第二十七

遊戲尊者

摩訶利尊者

觀身定空尊者

乾陀利尊者

見人飛騰尊者

摩利不動尊者

七佛難提尊者

辟支轉智尊者

初寶覆藏尊者

大忍尊者

嚴土尊者

金首尊者

辨德尊者

天動尊者

不動尊者

善眼尊者

善調尊者

大相尊者

梵勝尊者

摩帝尊者

曇摩尊者

明照尊者

無量本行尊者

成就因緣尊者

解空空自在尊者

師子比丘尊者

三昧精進尊者

阿那邠提尊者

山頂龍聚尊者

法藏永劫尊者

無憂自在尊者

金髻尊者

香象尊者

離垢尊者

魚勝尊者

休息尊者

智積尊者

勇寶尊者

帝網尊者

善住尊者

歡喜尊者

光曜尊者

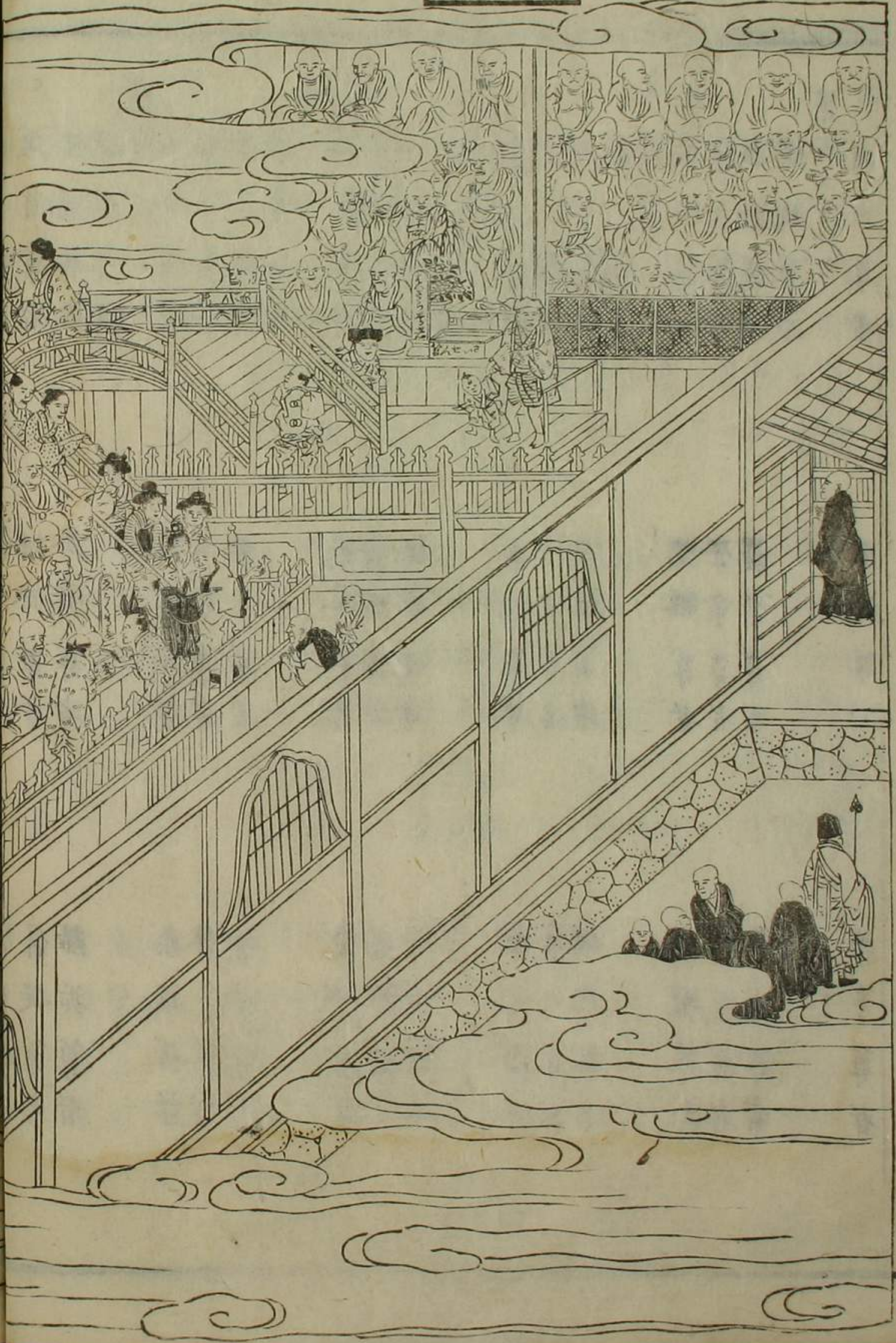
善等尊者

五百羅漢堂
內相之圖
共五枚

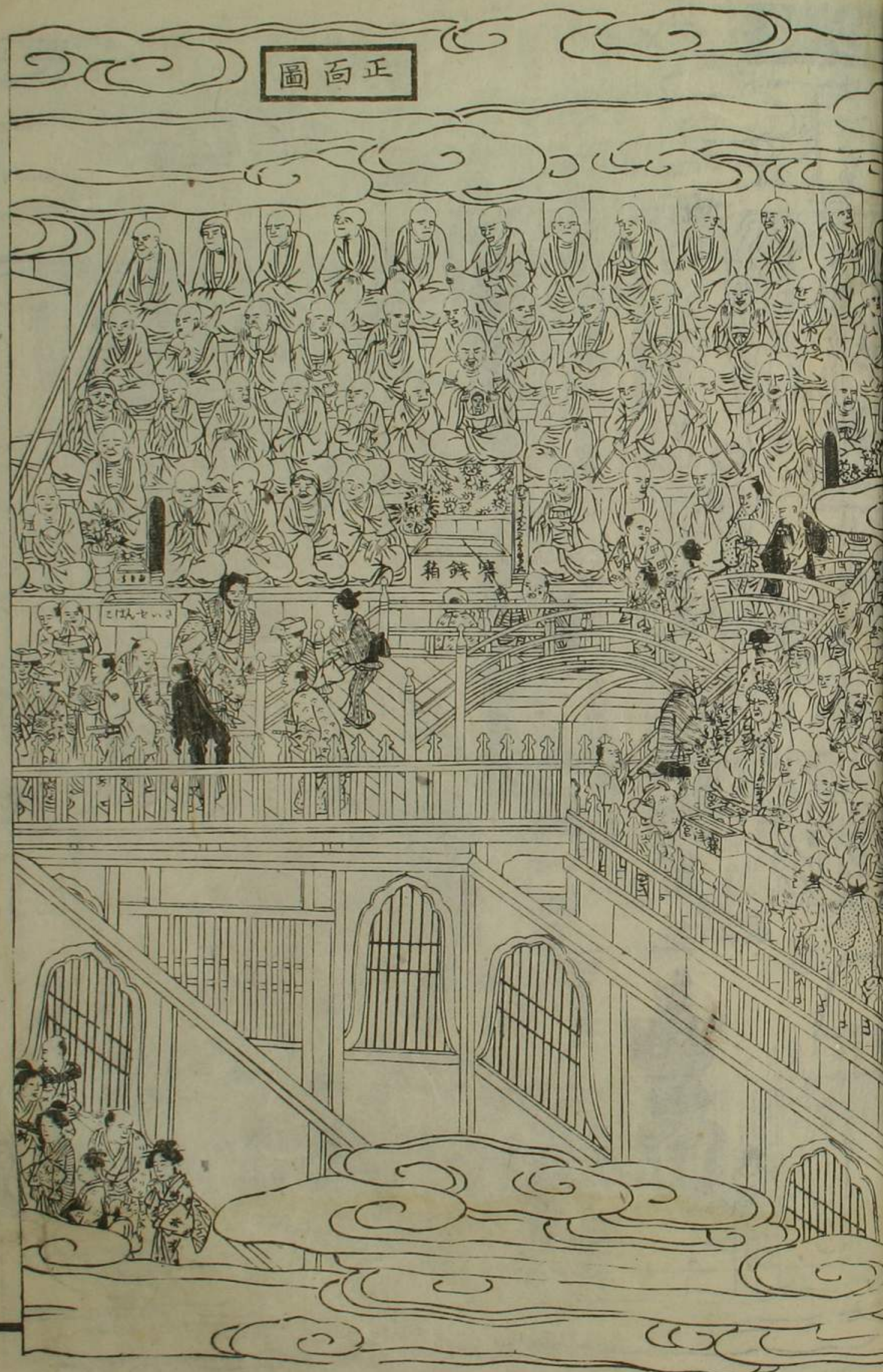
東漢羅
之堂面圖



正面圖



正百圖

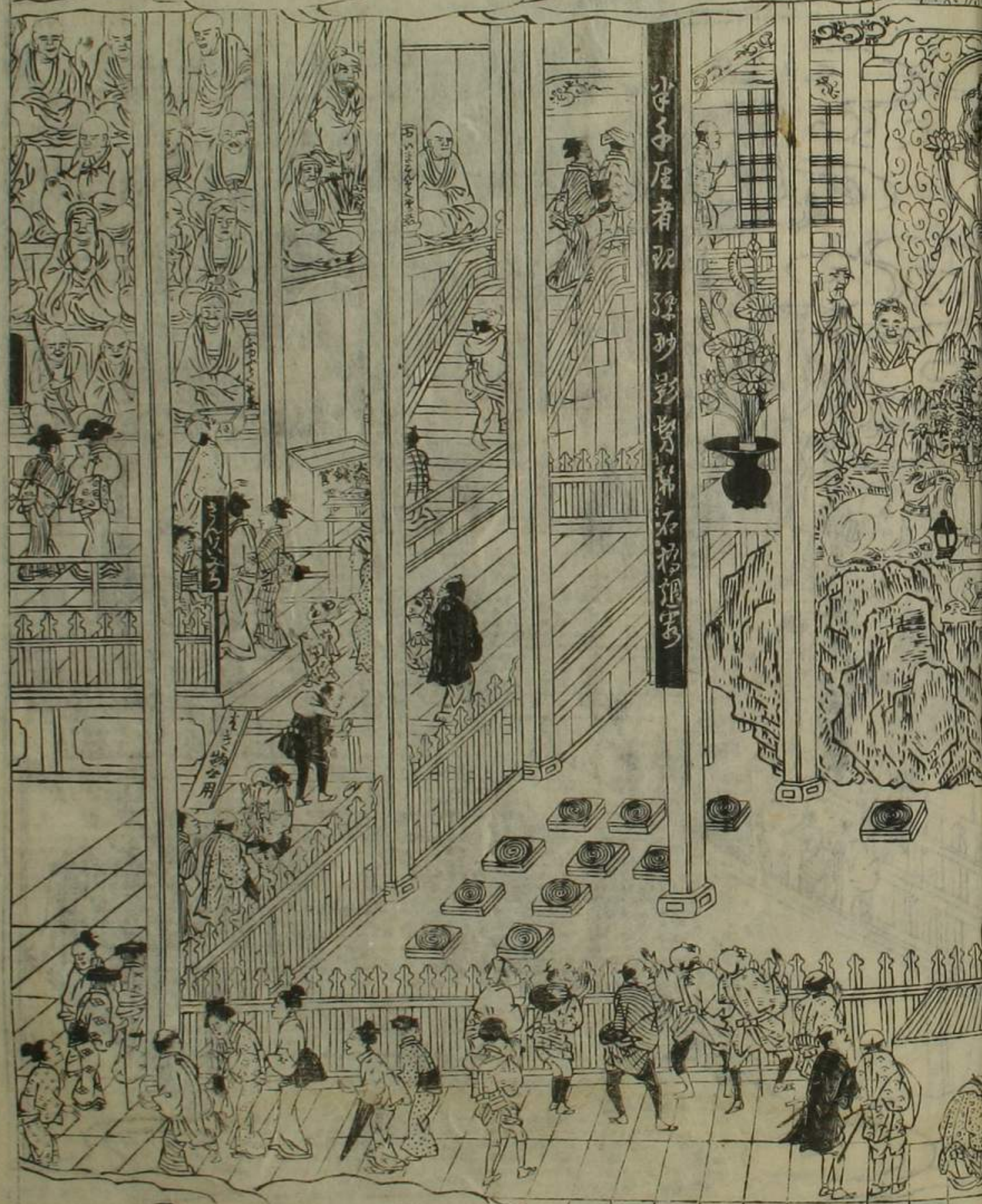


東漢之西羅堂面圖



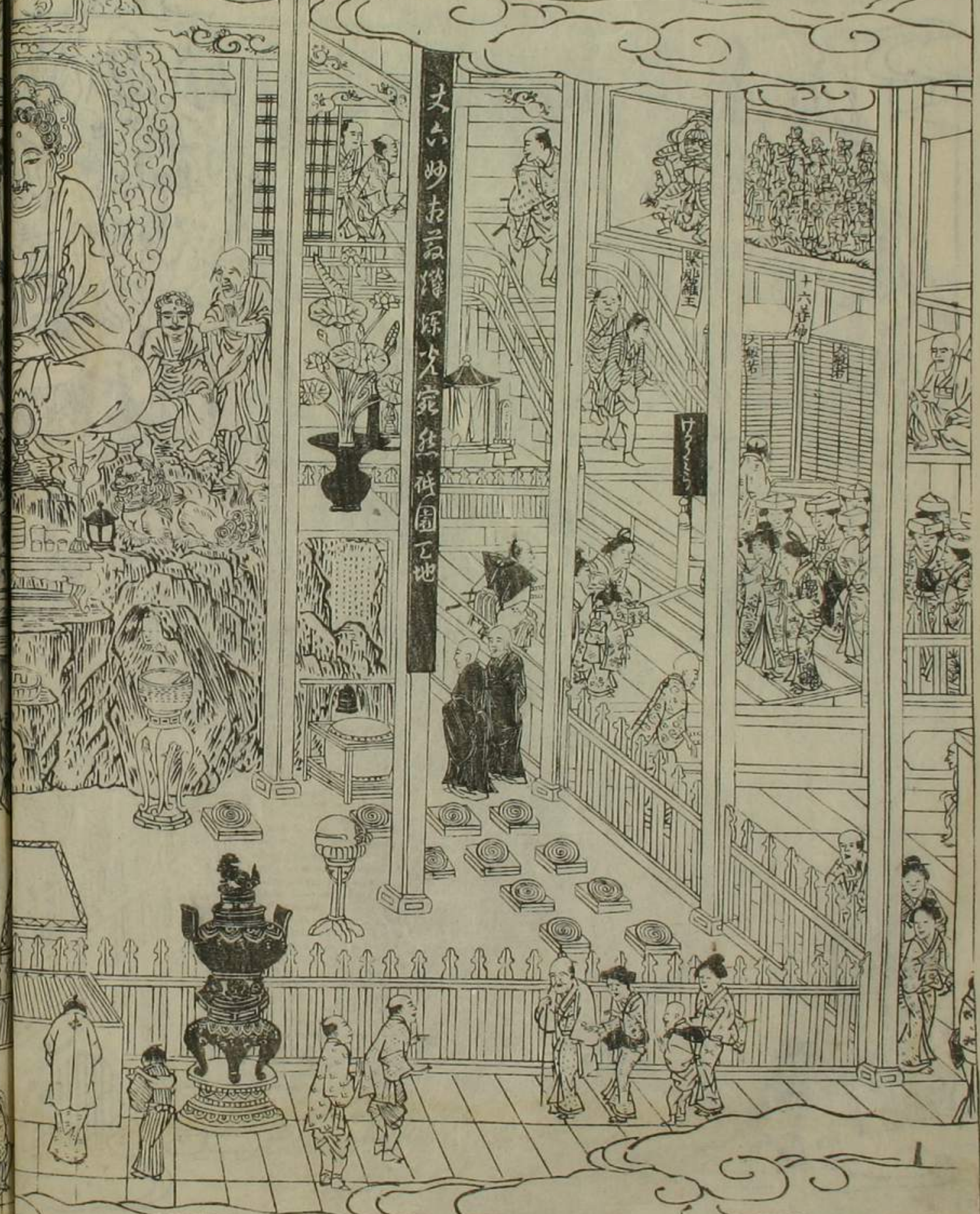
正 面 圖

正 面 草 圖 之



堵 闍

正 面 圖



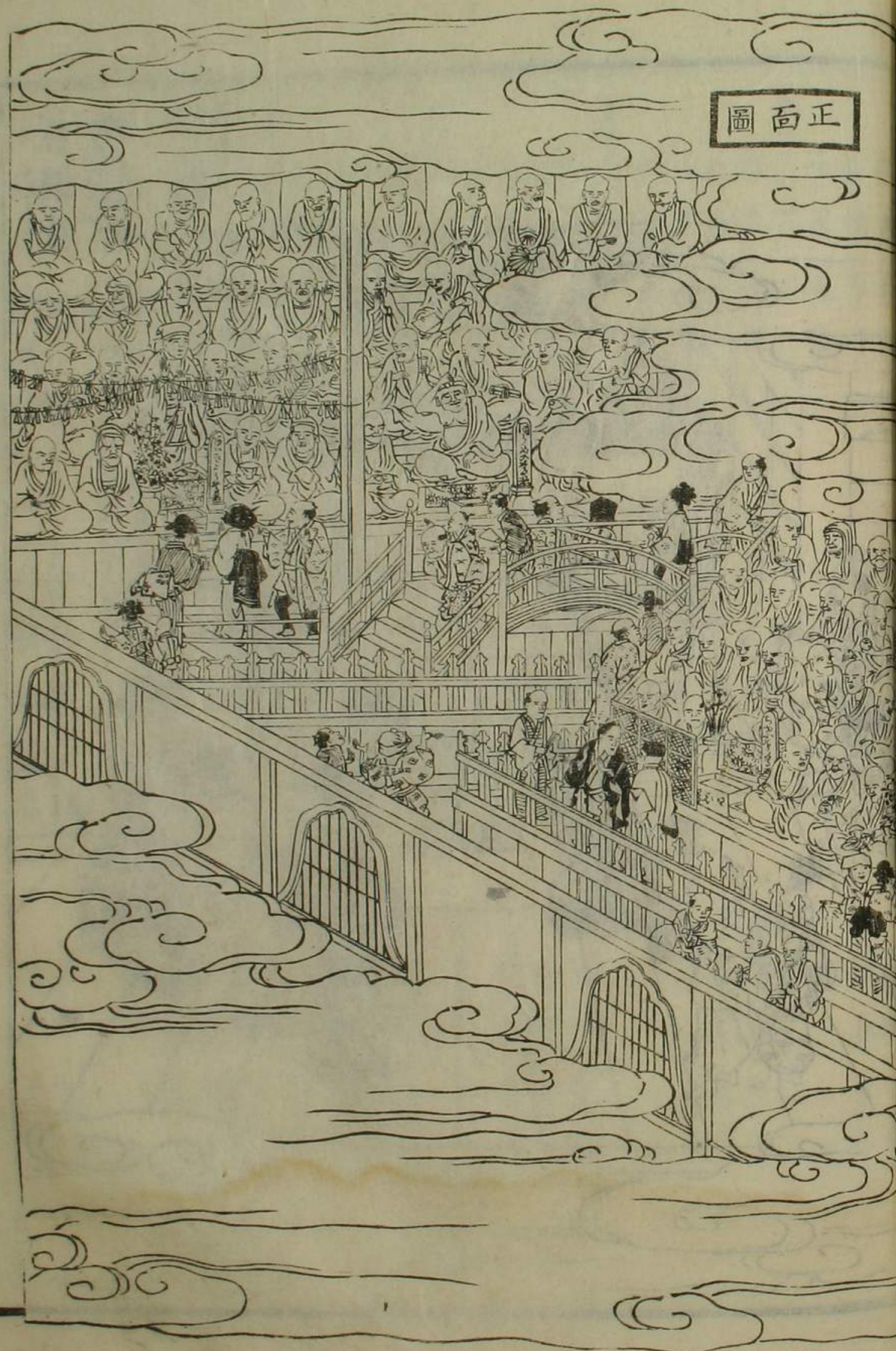
西漢東之
羅堂面圖



正面圖



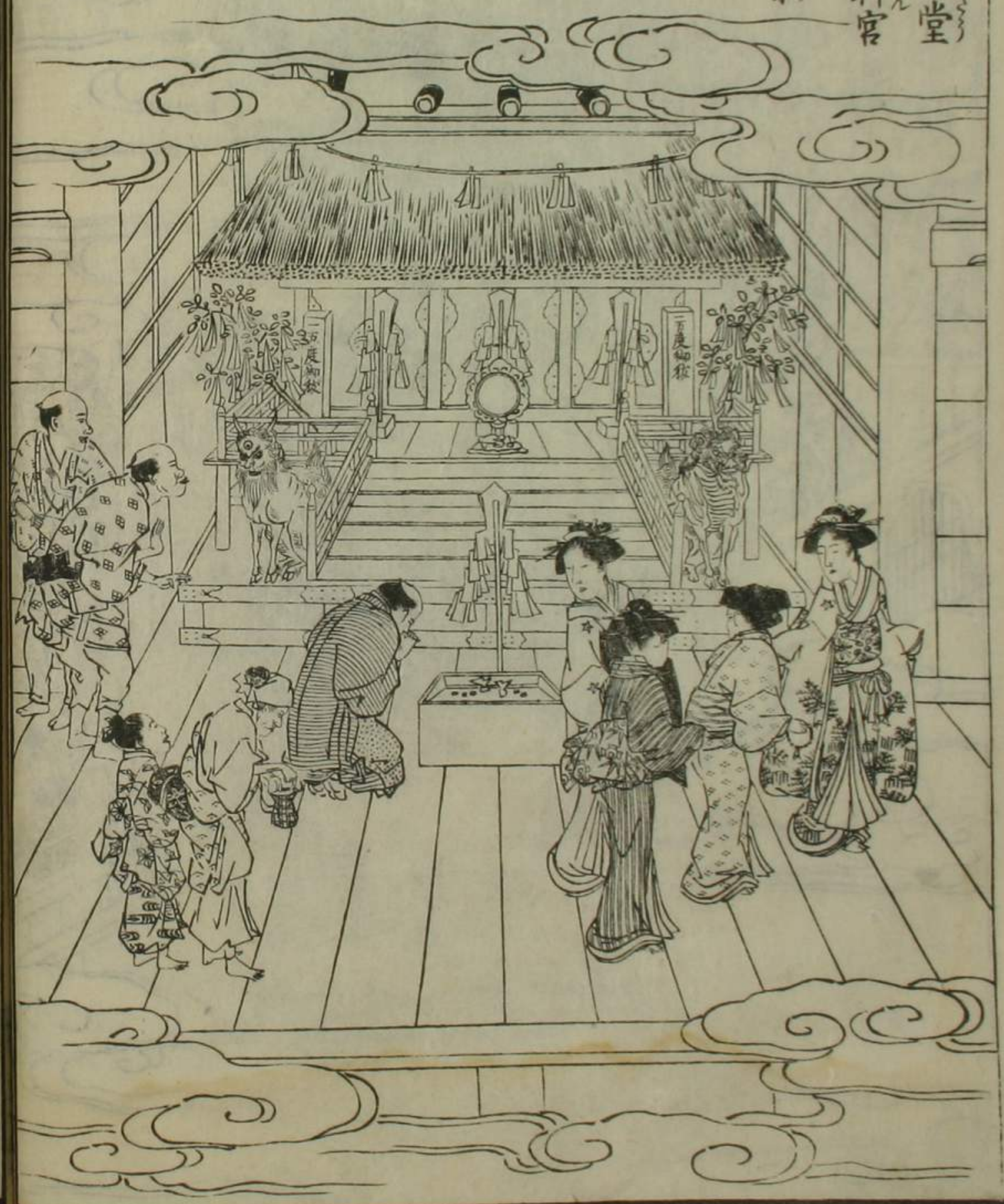
正圖



西漢西羅堂之圖



羅漢堂
護法神宮
かんじょう
むふしんぐう
かんじょう
むふしんぐう



助歡尊者
寶涯尊者

難勝尊者
觀身尊者

第百七十一
善德尊者

喜見尊者
愛光尊者

善宿尊者
花光尊者

第百八十一
妙臂尊者

弗沙尊者
淨正尊者

德光尊者
善觀尊者

第百九十一
善星尊者

電光尊者
淨正尊者

寶伏尊者
善觀尊者

第百二十一
月眼尊者

慈地尊者
滿宿尊者

慶友尊者
闍陀尊者

第百二十一
樂婆羅門尊者

俱那含尊者
吉祥尊者

三昧尊者
鉢多尊者

心平尊者
火燄尊者

不可比尊者
顯羅墮尊者

第三百二十一

頤怡尊者

燈導尊者

須達那尊者

士應真尊者

堅固心尊者

聖劫空尊者

功德相尊者

白香象尊者

識自生尊者

聲引眾尊者

鬱多羅尊者

大藥尊尊者

勝解空尊者

月蓋尊尊者

菴羅滿尊者

直福德尊者

須那利尊者

提婆長尊者

蘇頻陀尊者

瞿伽梨尊者

周陀婆尊者

井露汰尊者

超汰兩尊者

聲響應尊者

光明燈尊者

忍生心尊者

讚歎願尊者

離淨詒尊者

福業除尊者

修無德尊者

栴檀羅尊者

項生尊尊者

喜見尊尊者

咸大尊尊者

衆德首尊者

住世間尊者

自在王尊者

德鈔汰尊者

應赴供尊者

執寶炬尊者

阿氏多尊者

定拂羅尊者

鳩舍尊尊者

羅餘習尊者

喜無著尊者

心定論尊者

薩和壇尊者

草藍王尊者

法首尊尊者

金剛藏尊者

日照明尊者

無量明尊者

光明網尊者

無憂眼尊者

去蓋障尊者

淨除垢尊者

無盡慈尊者

行願持尊者

天眼尊尊者

寶蓋尊尊者

喜信靜尊者

金光慧尊者

伏龍施尊者

蓮花淨尊者

利亘羅尊者

天音聲尊者

大威光尊者

寂上尊尊者

最無比尊者

持世界尊者

第四百二十一

定花至尊者

無垢藏尊者

除衆憂尊者

善修行尊者

自明尊尊者

去諸業尊者

颯陀怒尊者

無盡智尊者

神通化尊者

摩訶南尊者

幻化空尊者

拘那意尊者

調定藏尊者

自在主尊者

金剛尊尊者

超絕倫尊者

無邊身尊者

除疑網尊者

無垢德尊者

坐清涼尊者

和倫調尊者

慈仁尊尊者

那羅達尊者

編具足尊者

思善識尊者

無量光尊者

賢首尊尊者

金剛明尊者

明世尊尊者

燭慢意尊者

月菩提尊者

最勝幢尊者

光
耀
明
尊
者

精進辨尊者

四百五十一

四百六十一

具足儀尊者

四百八十一

四百九十一

大弟子

巴賓
古度
巴羅
反距
物吸

卷之四

普莊嚴尊者
大塵障尊者

法心謝
 上觀雲
 尊淨雨
 尊尊尊
 尊者者者

善行師
佳無子
義邊翻
尊尊尊
者者者

師子作尊者
勇猜進尊者
淨那羅尊者

質壤
直魔
行軍
尊尊
者者

大熾妙尊
高遠行尊

拔導
衆大
苦衆
尊尊
者者

得定通尊者
拔度羅尊者
鉞利羅尊者

迎目
旃捷
延連
尊尊
尊者

半揭 迦
託陀半理
迦尊諾迦
尊者迦尊者
尊者尊者

悟真常尊者

太
通
尊
首

拔衆苦尊者

得定通尊者

鉅利羅尊者

迦旃延尊者

伐蹉尊者

羊
諾
迦
尊

半詩邊真

一音變動警覺曉昏
觀音大士如入此門
幽明莫滯功德難論
存沒俱利消融百冤
雲禪功烈函益乾坤

修洪規範解塵勞煩
由通無礙卻忘聞根
國平生恬直證本源

元祿九年丙子四月穀旦

牛頭鎮牛機謹誌

掘樹 境内よりえん五年庚申掘樹九十餘株を

挑の云手

えん紀え丙辰
當寺の境内南

我れぬゆゑなり

岡山堂

方丈の東より此の保十八年の頃鐵眼禪師當寺を退玄の後

の像を遷す三代堂とも稱し鐵眼禪師を以て象先和尚ありひは松雲老人ホ

中興象先和尚の黃檗四世の法孫として鐵眼禪師の法脈なり

當時松雲禪師化寂の後假堂も破壊し佛像も雨露の

ぬれ侵されたりを深く患へ正徳三年癸巳本所鐵眼

和尚の命を受始て大に戸を来り當寺に住して享保二年丁酉

正月より十有餘年の間心肝を碎れ寒暑風雪の厭あり

日々に府中の街市へ入て行を既して勸進の功汝慕り受

る所の一握一投の采儀を積て其料に充て同十年己巳より今

存する所の佛殿僧房悉く建立成就せしを依同十四年己

酉二月岡堂惣供養の大法會を行ひて孟蘭盆の大施餓

鬼會を用く當寺岡山の象先和尚たるを其に顯然たり

とどとも故より鐵眼禪師を岡山と自の所寶列和尚

を二代と又松雲禪師創業の大功あるを以一代岡基と稱し

自三代の席に坐せしる隱え禪師歸化の後持齋一食うて

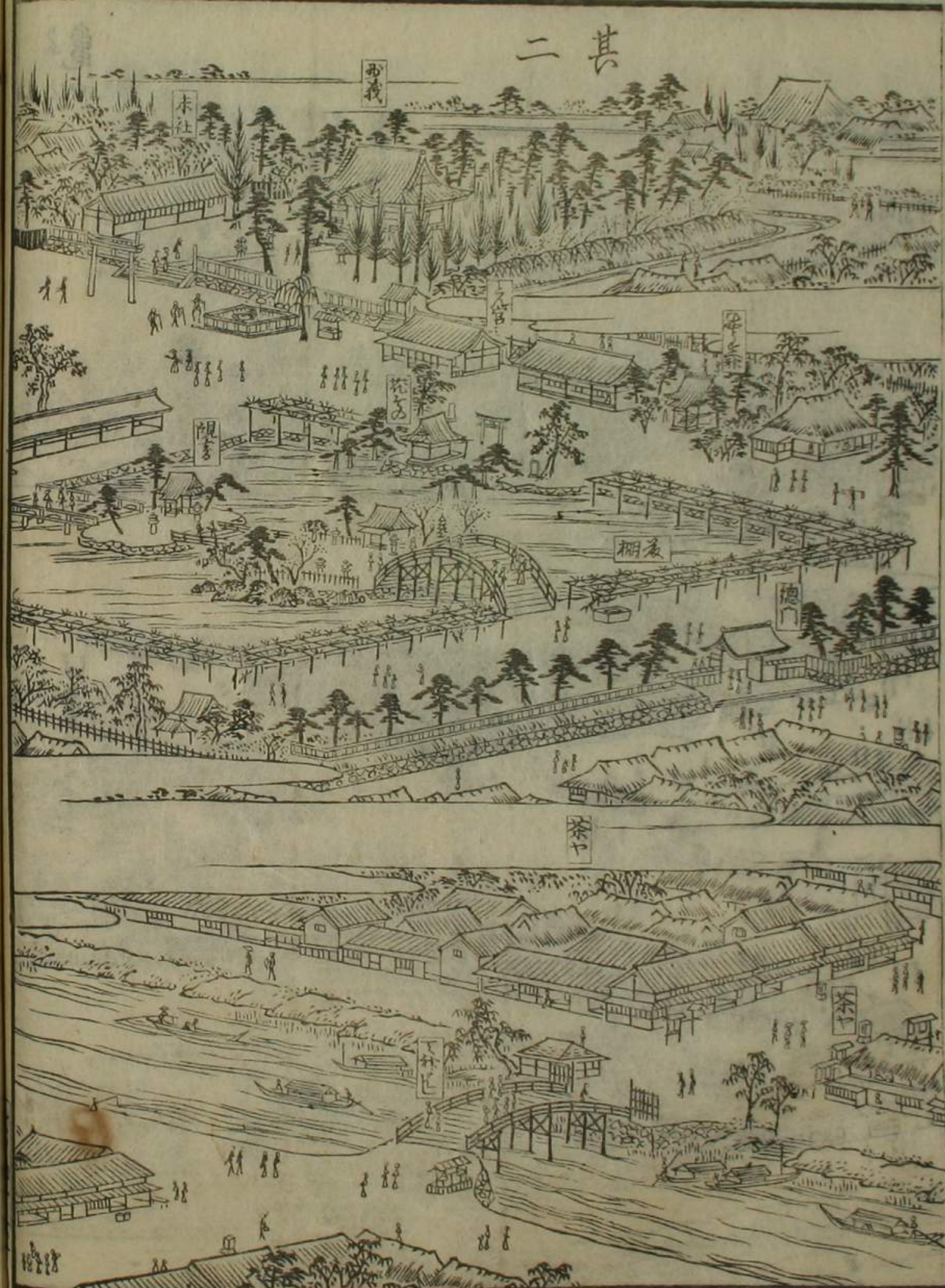
渾く貧者とのれし佛像經卷と古た袈裟の外より聊も

聊も貯る事なり日々の勤行より般若經越分五卷と花嚴

經行願品百五十卷とを讀誦し觀音の尊号を書寫する

其數積て山の如く又大般若經一部六百卷一字百禮して

是を書寫し其先出家得道の時楞嚴經等入て法道成



年甲辰十二月

大樹始て當寺へ入せられ其後同十五年正月

月晚課 御聴聞翌年十二月方丈より陞坐住持象先是を

勤む同十九年甲寅三千畝の地代添ふひ同二十年乙卯境

内より新殿を當寺へ移されまより後此地より御放鷹のあはれを

わたりて當寺へ立寄せのりたり月毎の朔日より

観音藏法を行行し十六日より大般若經轉讀あり七月

より多れい毎夕施餓鬼を行行し十六日廿五日晦日の殊に

道俗群衆を象先師より已來當寺の住持ハ風雨寒暑

を厭わす月々に大江戸の市中を行乞すをりて勤行

と努む

宰府天満宮 龜戸村より故より龜戸天満宮とも唱ふ

別當を天原山東安樂寺聖廟院と号せし司務兼官司

大島居氏奉祀せり 當寺列ある御當寺連教の列は知られぬ毎

所々當社の南登川通北松代町四丁目にある 花岡社 花岡社の

祭神の時作樂を 祭神 天満大自在天神 相殿 天總日命 三坐

本社 祭神 天満大自在天神 相殿 天總日命 三坐

紅梅殿 本社の前右の方にあり筑前太宰府 老松殿 一夜を裁し

回廊 環門 四角の正面の門をいふ 御嶽社 本社の前より意僧の

と當社の所よりなりて見ゆるなり 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

とあり 額宮明神 御嶽社より昔 額宮明神 御嶽社より昔

五ノ素
 元禄十四年
 二月二十五日
 聖廟八百餘
 御年忌於
 龜戸御社詩
 歌連御令與
 行一坐

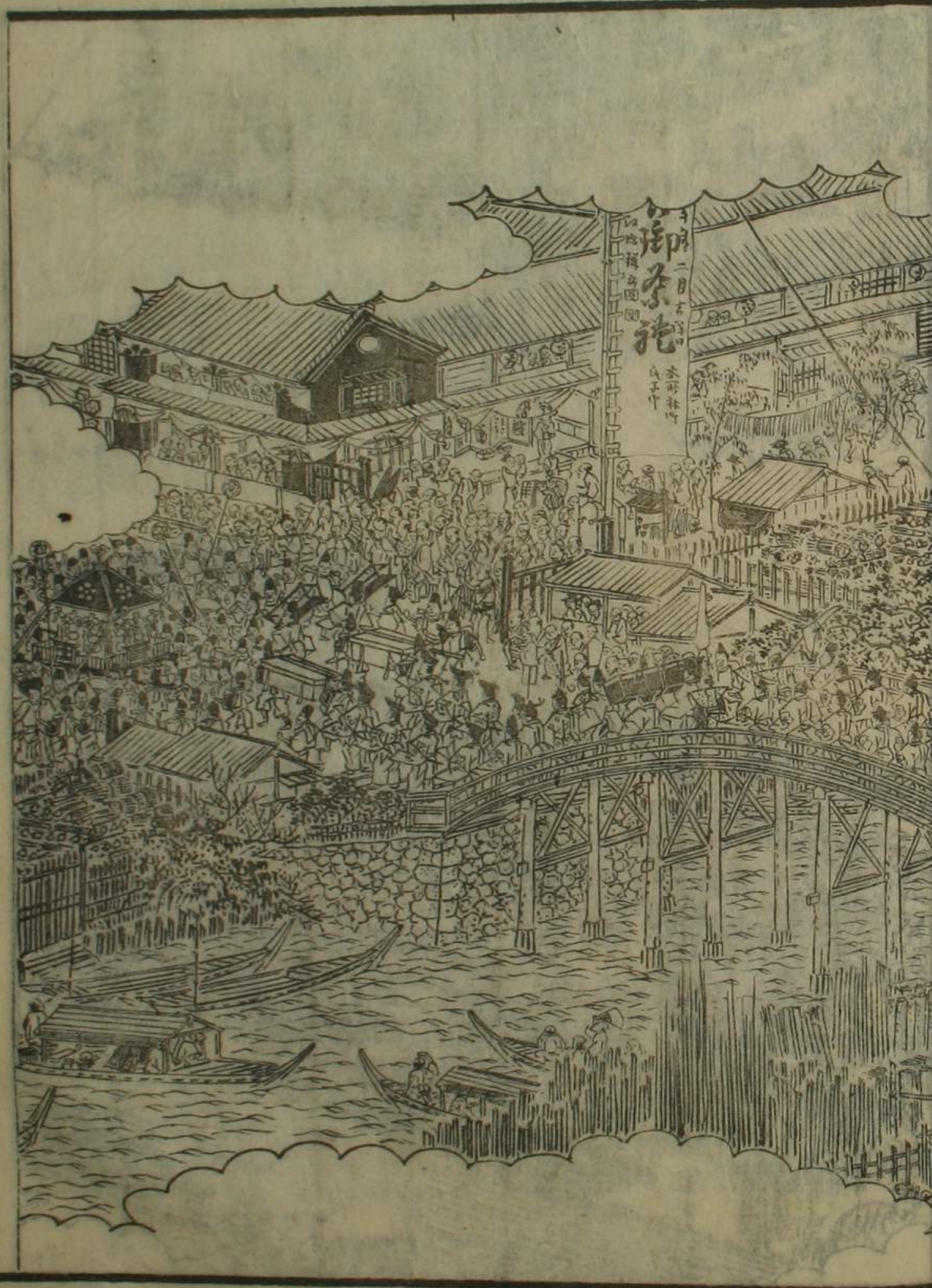
梅松
 也

二月二十五日
 菜種神事

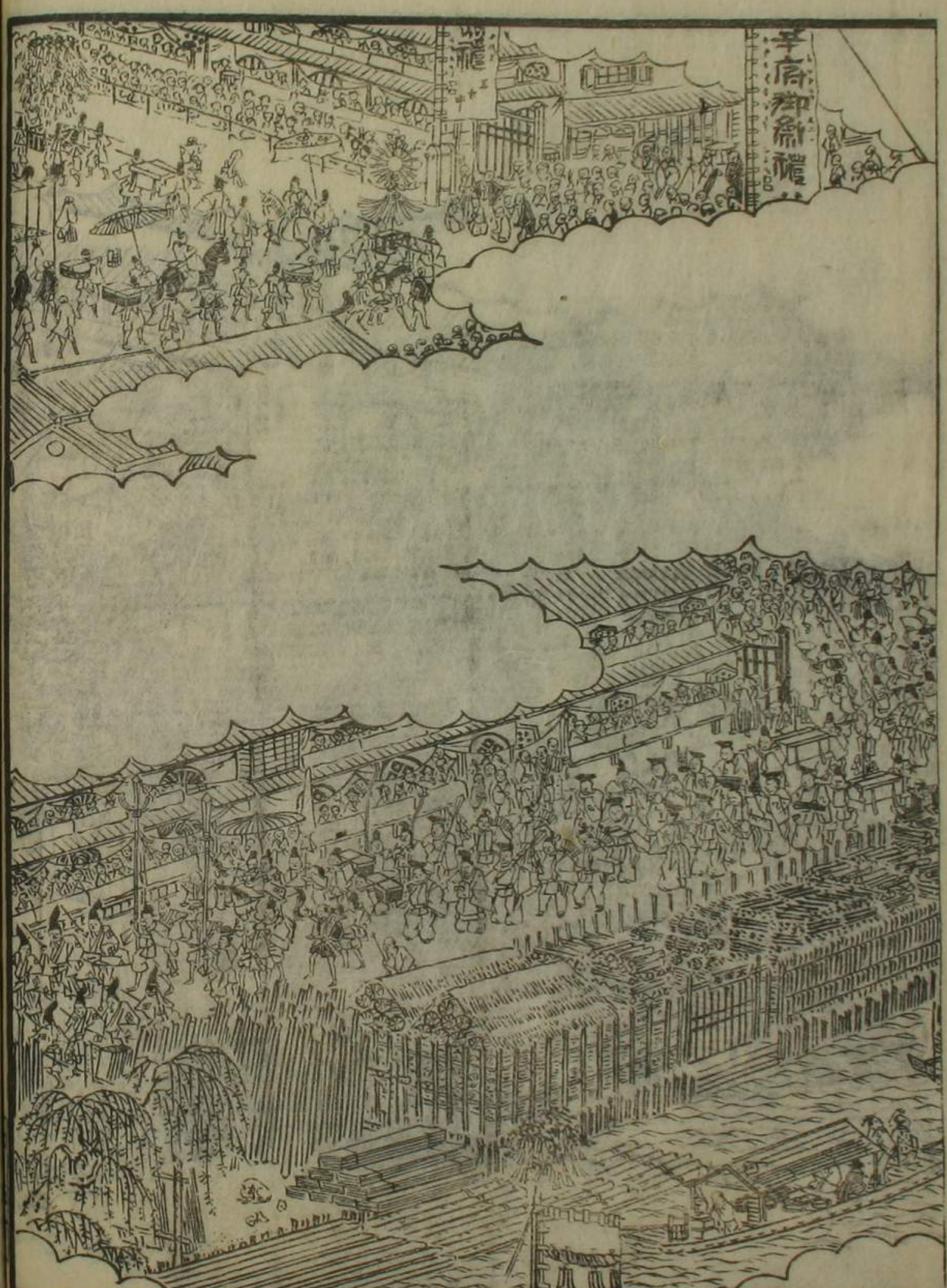
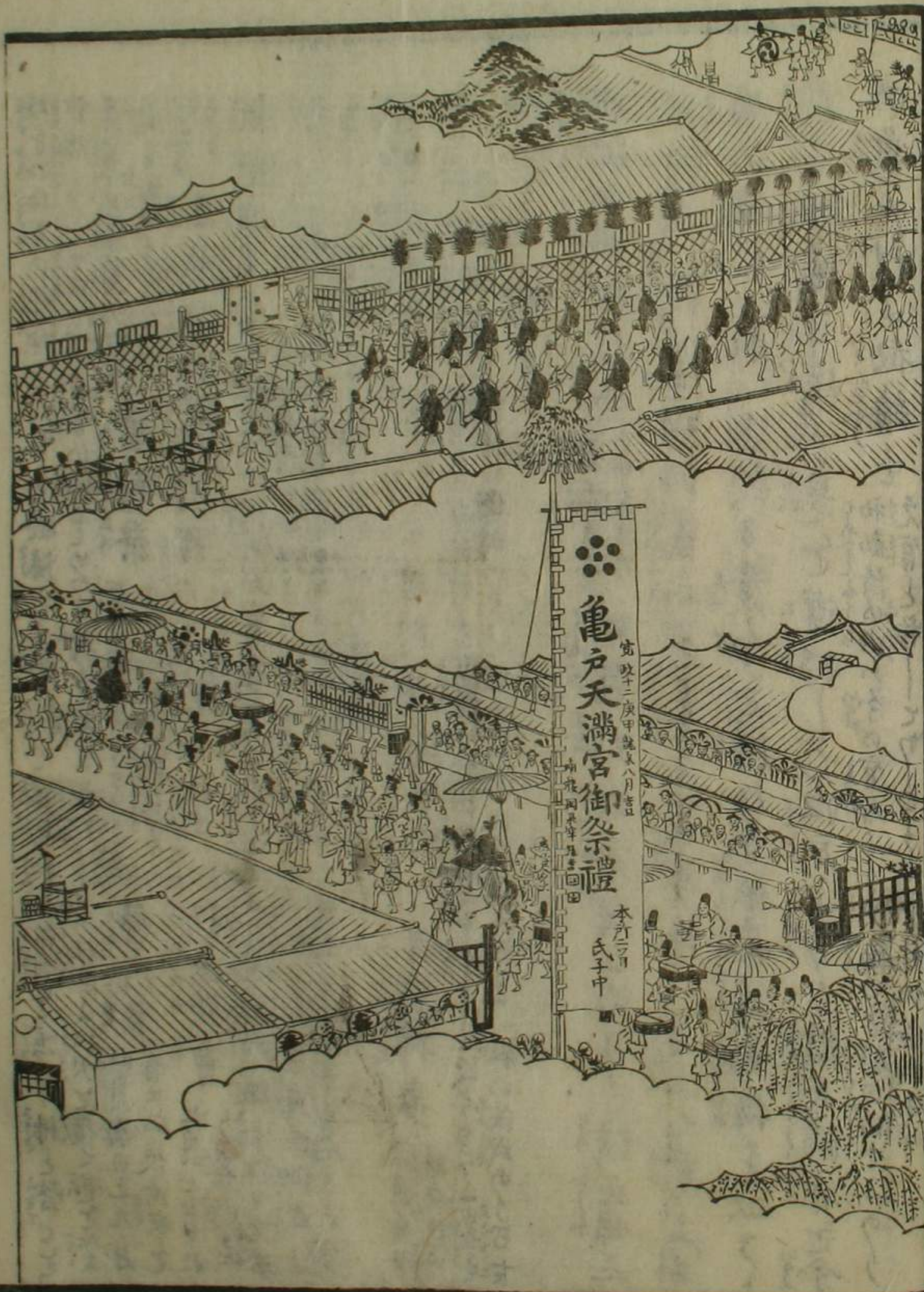


あおひろ
 板も
 八百
 其角

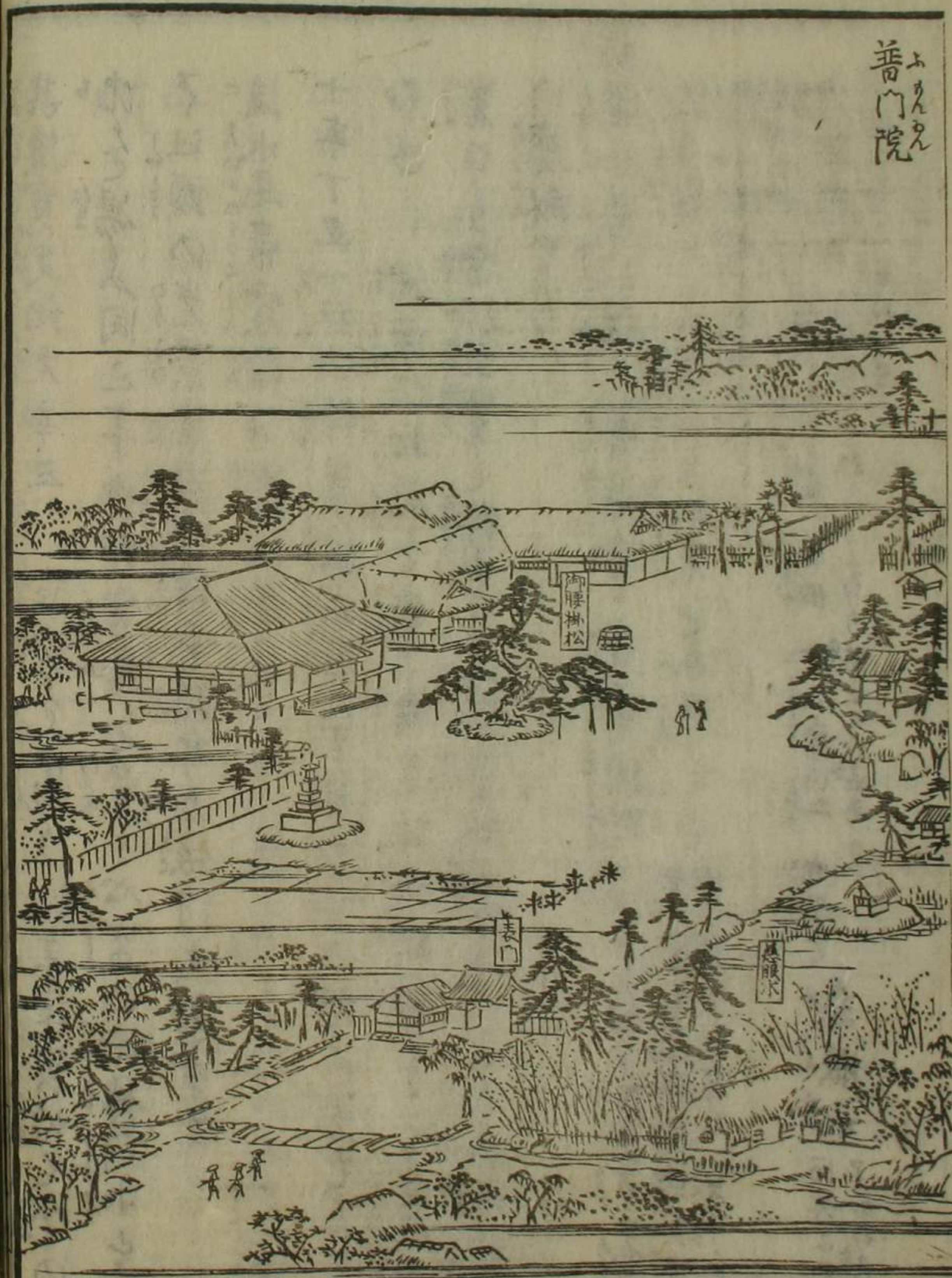




亀戸天満宮祭礼
 神輿渡御行列之圖
 毎歳八月廿四日
 の日、旗本・御家人・代官
 等、皆参りて、
 産子の町も、縁起の世
 都鄙の、先づ、群集
 する、一處あり



普門院



身代觀音菩薩

當寺に安んずる傳教大師の像

緣起云大永二年壬丑千葉公

中勢自胤

三勝の城中

一字の梵刹を闢此靈像を安置

今の普門院

三勝と云ふ隅田川流津川荒川の落合に三保

今を以て普門院と稱す

沈没を其後を名づて鐘

鐘の聲を以て鐘と稱す

往古千葉自胤の臣佐田

善次盛光

後醍醐天皇の御時

此靈像の加護より其白刃段々に壞

此靈像の加護より其白刃段々に壞

又天文三年國中大火疫疾流行

死に至る者少く

死に至る者少く

此靈像を念する輩の悉く病

平愈

延の患

其後佐長榮上人睡眠の中一老翁の来るあり

吾は是夜を畏大士なりある人の代り疫病を受故に病苦

亀戸邑
道祖神祭



毎歳正月十四日
此の童子多く
あつて菱垣
造りよしたる
小き船に彩の
幣帛を建ね竹採
を飾り其中
央に宝舟といふ文
を添へて機を建
たると竹採の音
を以て連て此辺を
持ち行なり其夜
童子集會して花
火を
恒例とせ



一身に逼るり上人願わ我法一千座を彼して予う救世の加彼
力とあるへーと夢覺て後益殺車を曳く卒そを引奉るふ
佛跡へ行くらと蓮臺に法る感涙肝を命一まより晝夜不
退一千坐の觀音供を彼して圓中頓に疫疾の患ひを
遁とくると故に世俗身代觀音と唱へるなり
卧龍梅 日所清香庵あり俗間梅屋敷と稱し其花一品
うて重瓣潔白なり薰香至て深く形状宛も龍の蟠卧
如く園中四方教十丈の間は蔓て梢高々と枝毎に半
地中に入地中をせし枝莖を生し何れを幹ともわきとあり
わきも屈曲ありて自其勢を彰と仍卧龍の号ありと
り梅譜は卧龍梅就杯りなりなり

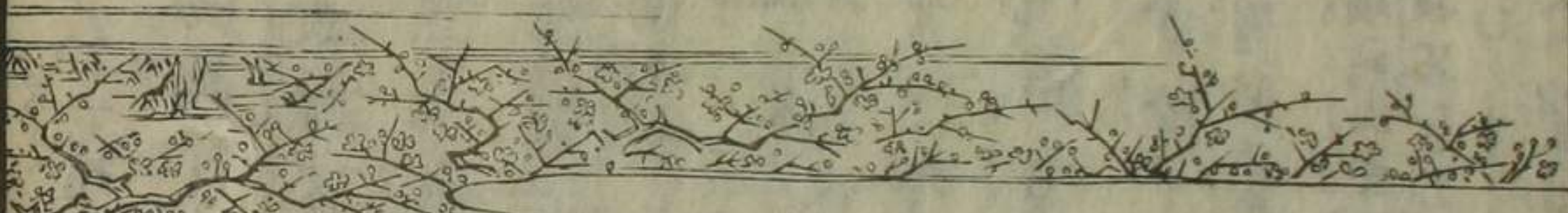
梅譜曰 本都城二十里有卧梅偃蹇十餘丈相傳唐
物也 謂之梅竜好事者載酒遊之云云

神明宮

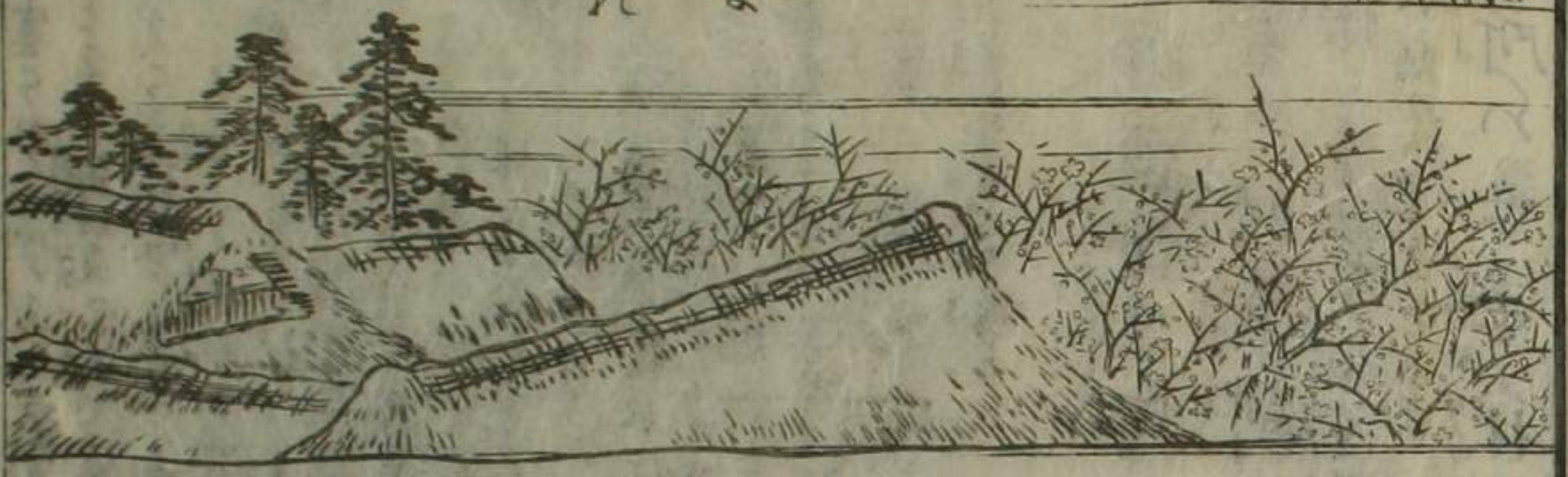
日所あり宮居の一堆の塚よりあり相傳へ上北此

一の小嶋よりて其繞り海面なりと其頃渡海の船風浪の
難く遠くは勢雨皇太神宮の加護より命を免ふ
報賽のため此地に神を勧請なり宮居を營じ
とつ
の傍にありて神木とて
穿て土中より漁網は具とる不の礎と名つるものあり今も此の地を
より人云がうのりて樓の一を大平樓と号し社比をも大平樓と稱する
明王山東覺寺 同所南の方にあり真言宗よりて寺嶋の蓮
華寺に属し本尊の弥勒觀音勢玉の三尊あり當寺は
四年辛卯草創なり所の寺院よりて岡山を玄覺法印と号し
不動堂 當寺は安置を良兵衛僧都の彫像よりて相列大山寺の奉るとは傳
縁起曰當寺は在草庵なり頃岡山玄覺法印に住せらる者なり
辛卯或時負足の優婆塞まりて投宿を乞ふ法下許諾し其夜床は
法下怪し其身を剛とつとも壯士の聲惡の如くききし其時投

梅屋敷 白雲の 龍を 呼ぶ や 梅の花 嵐雪



如月の花盛 芳の雪 餘香の 花の 後実とて 乾し 常とて 殊に 美 花 貴す人 花土産 とも







亀戸邑の常光寺江戸
 六所弥陀回の第六番目
 あり垂秋二度の彼岸
 中都鄙の老若衆詣
 群集
 七五

登れを行ひて、頃此辺に於て海面あり、其の春を流し、其止る處を以て後所と定へ、と誓ひたり、其春の止る處、と云ふ、一と云ふ、故に今も昔の例より、僅の間あり、由十間川より、て神輿を舁、後所へ神幸なり、と云ふ、

東林山寶蓮寺

善藏院と号し、真言宗あり、寺鳴の蓮、

寺に属する、虚空藏菩薩の行基大士の作あり、江戸三蔵空藏の一作あり、相傳嘉元元年、

癸卯俊鑑法印草創する所の精舎あり、始に相列小田原より、

西歸山常光寺、同所一丁あり、巽の方にあり、曹洞宗の禪刹、

西歸山常光寺

同所一丁あり、巽の方にあり、曹洞宗の禪刹、

一と云ふ、後所の總泉寺に属する、岡山行基大士中興の勝庵最大和尚と號す、本尊所依陀如來の像、即行基大士の作あり、中興大士の時當寺の本尊大端六番目あり、來迎松の佛殿の前より存せり、

松燈松の同一、左の方にあり、時として樹上へ、毎歲二月八月の彼岸、

中祭請まり、

龜命山慈光院

同所十間川を隔て、向よりあり、當寺も洞家の禪刹、

一と云ふ、後所の總泉寺に属する、永正十一年甲戌、葛西出雲守某の令室慈光院殿草創する所の寺院なり、岡山嵐巖和尚、

本尊觀世音菩薩の像、此地より東の方の土中より、と云ふ、あり、と云ふ、又境内に安置せる辨財天の像、智證大師の作、

あり、と云ふ、葛西出雲守某の尊信あり、と云ふ、靈像なり、と云ふ、

吾孺權現社

同所十間川の傍よりあり、此地を吾孺森、又浮例、

と云ふ、號し、別當の宝蓮寺あり、

本社祭神、茅橋媛命、一坐、

日、本、書、紀、神、代、卷、曰、日本武尊初至駿河、其處賊陽、從之、欺、曰、是、野、也、麋、鹿、甚、多、氣、如、朝、霧、足、如、茂、林、臨、而、應、狩、曰、本、武、尊、信、其、言、入、野、中、而、覓、獸、賊、有、殺、王、之、情、放、火、燒、其、野、王、知、被、欺、則、以、燧、出、火、之、向、燒、

而得免 一云王所佩釵 蓂雲自抽之 薤雲此云武羅玖毛 是

津王 曰進相 欺則悉焚 其賊衆而滅之 故号其處曰燒

有從 王今風 起浪 必入 海言 訖乃 披瀾 入神 心也 暴風 願以 止

之身 贖王 之命 而人 荒其 海言 訖乃 披瀾 入神 心也 暴風 願以 止

相得 著岸 故時 人荒 其海 言訖 乃披 瀾入 神心 也暴 風願 以止

相生 樟 本社の 前右の 方に ありて 二股 ありて 根二 幹ありて 根二 幹ありて

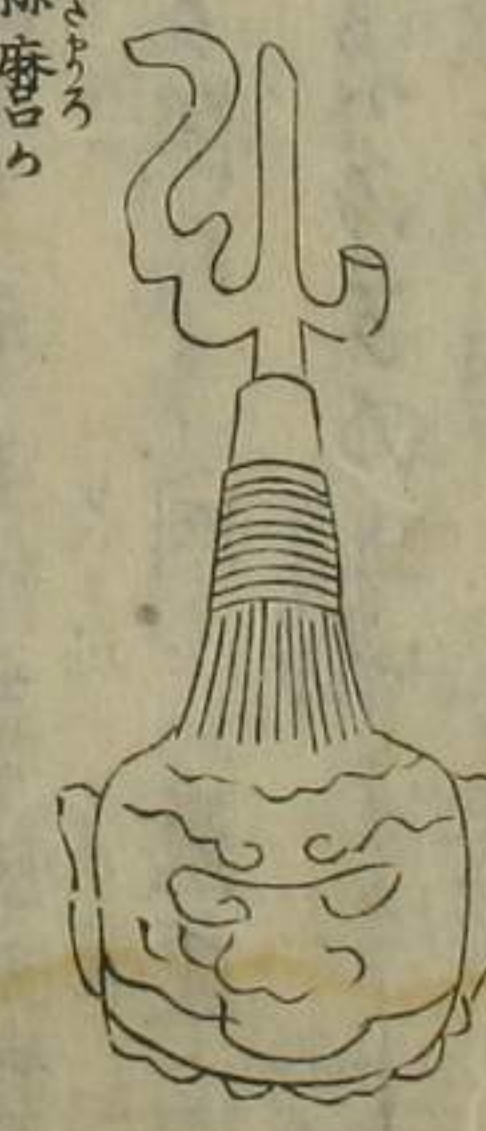
と宣ひ 所々 自所 廟の 東の 地より ありて 未代 平天下 ありて 根二 幹ありて

其傍 ありて 樟の 葉あり 是も 根二 幹あり 神寶 古鈴 一口 銅色 愛せし

是より ありて 常陸の 鹿嶋 正等寺 ありて 又息男 縣磨の 家も ありて 其形 状大同 小異 ありて 故に 之を 臨一 ありて

鹿嶋正等寺藏

藤原縣磨藏



社記曰 人皇十二代 景行天皇の 御宇 四十年 皇子 日本武尊 東夷を

征伐し ありて 時相 摸國より 上総國に 往し 王船 乘たし

海中に ありて 頃暴風 忽起り 王船 漂蕩て 渡るへ ありて 時

妾 茅渢媛曰 今風 起浪 必して 王船 没し 是必 海神の

心なり 願ひ 妾の 身を 以て 王の 命を 贖ひて 海に 入し 言訖 瀾を

披て 入め ぬ 暴風 即止 王船 乃ち 着り 渡得 あり 難州 ありて 遠たし

其後 茅渢媛の 沖裳 此邊の 海上に 浮ひ けれ 尊群 臣に

命して 此所より 収め 壇を 築あり ありて 端離を 巡りて 所廟と ありて

荒陵の ありて 承久元年 北条 義時 幕下 鈴本 隼人 正神尾

采女 井出 大學 等の 諸士 小祠を 創營し 神領 三百石を 附たり

一とあり 其後 永祿の 頃 小田原 北条 家の 氏を 山丹波 守當社

を 再興 せし あり

わろ ちのり
吾 孺 木林
わろ ちのり
吾 孺 権現
れん ちのり
連理 樟

鳥々々

あけまの

秦城

足るにせ

月
二

入
2
の

波
子

考

人
子

孫承恭光

入道のわらわぢー
 身みのせがととるれあ
 のせ集あ載せたりー
 自みづかのみありまその
 ちちにちのち々々まの
 衆しゆのしゆ東あ人まととるり
 住すまーあありまととあり
 この東人あのまあり
 人ひとやまあり



日本武尊東夷征伐
 時相模國より上総
 國へ往く時一舟に
 其海上暴風忽ち起り
 王船漂蕩して危き
 所なりし時、鵜飼の
 身をとりて、贖ひ尊
 の命をたせり
 海神の託言に
 竟に調を授
 て入たまひ
 ぬる所の
 日本紀
 三



梅子小田原北条家の所領役帳にもき山内守房の中より西小田原村の地を以て一ヶ所小田原村井戸戸村と接して則此社の北の人材を以て其社の由も丹波守の所領を以てありと故に當社を後院と云ふなりと云

殖髮聖德太子堂

同所龜戸天満宮の裏門の通り川端に傍

て慈雲山龍眼寺といふ天台宗の寺境に安置して聖德太子の

所影の太子自親彫造ありありと云々所長二尺五寸あり其聖像の頂より太子と

妃との鬘髪を殖髮と云ふなりと云々當寺藏太子縁起云推古天皇十一年癸亥

太子所齡三十二歳同年十月廿八日僧限宮よりかひて靈夢を傳

る自親影像を作り班鳩の夢殿に納りしなり太子傳曆等此年影像

其後代々の帝王大寺をなりし其の君子堂に移し仍天智帝の

七年に百濟寺を嘗て安置奉りしより慶長七年壬寅よりある

近の同南都大安寺及び花洛蓮花王院高雄の神護寺ありひ

豆別田方の般若王寺相別鎌倉の法善堂武列小菅の最明寺

江別滋賀菅原寺相別金崎寺より移し奉り竟る宝曆十二年

壬午十月武列在源郡の清谷寺より移し長く當寺に安置

し奉ると云々

當寺の後園萩を多く栽て中秋の頃阿花の時期に壯觀

なり故に世俗萩寺と云ふなり

妙見大菩薩 日川端橋を越て向ふ角にあり日蓮宗法

性寺に安んずるの末由詳なり此道立靈驗著しと云々諸人

常と終に堂前に影向松と云ふ靈樹あり本尊初に此樹上より

降臨ありといふ故に星降松とも千年松とも呼ぶ元和の頃

大樹此松より云々あり一頃更に境の松と号を賜ひしと云

傳

天松山最教寺 同所三丁より隔て西の方にあり日蓮宗

よりて本寺より釋伽如來の像を安んずる寛永年間延山二十七世通

心院日境上人阿基に當寺に鎌倉將軍惟康親王蒙古鎮制

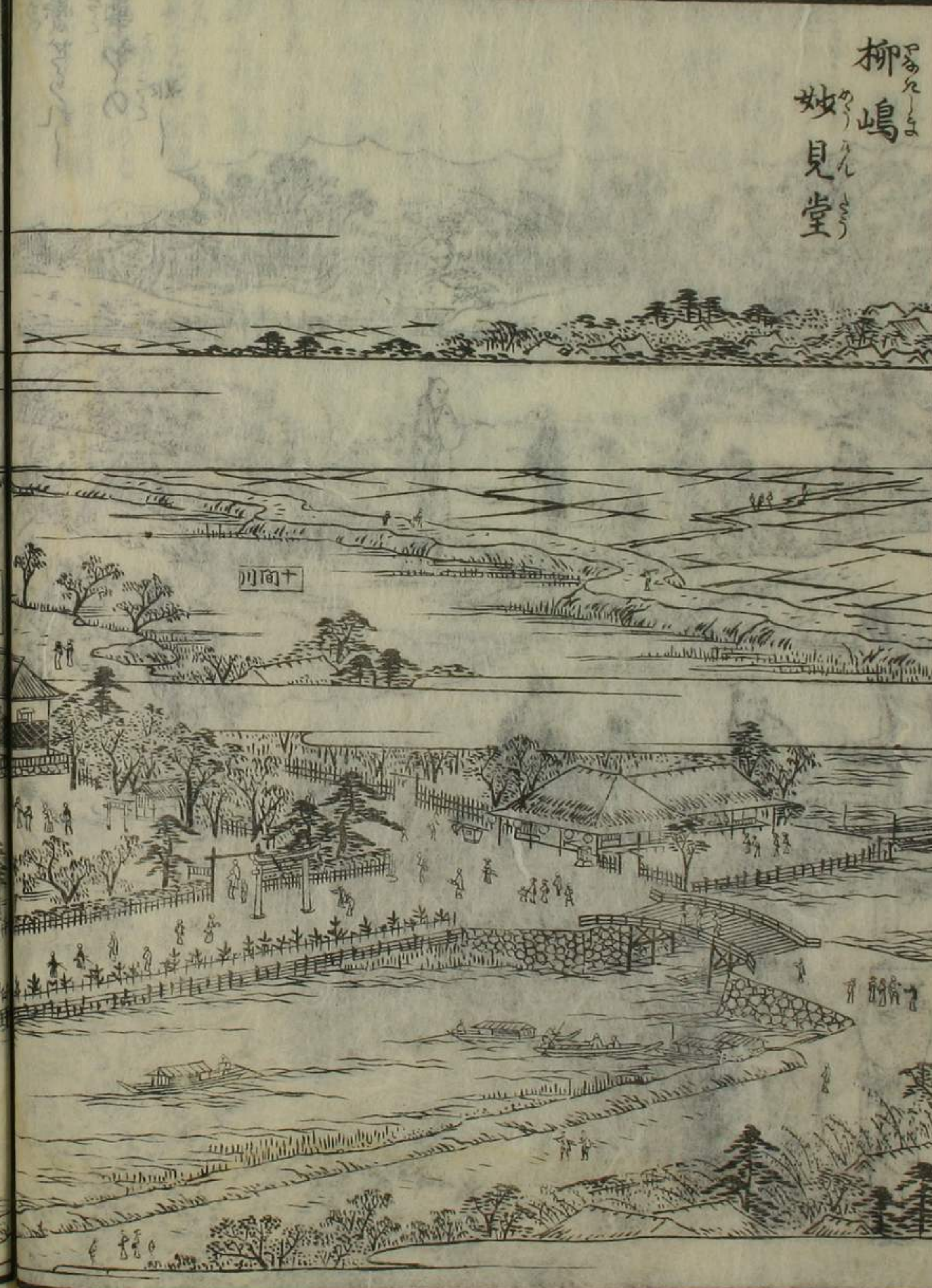
龍眼寺

庭中萩を多く
栽て中秋の一
奇観なり故に
俗呼ぶ萩寺と
稱せり萬葉集
茅子作和名
抄鹿鳴草作
續日本後紀
仁明帝義和
元年八月清涼
殿内宴を
是を芳賀華
の燕とのめ
ありて皇朝
ありて萩と



愛せられ
事やの





押上

最教寺

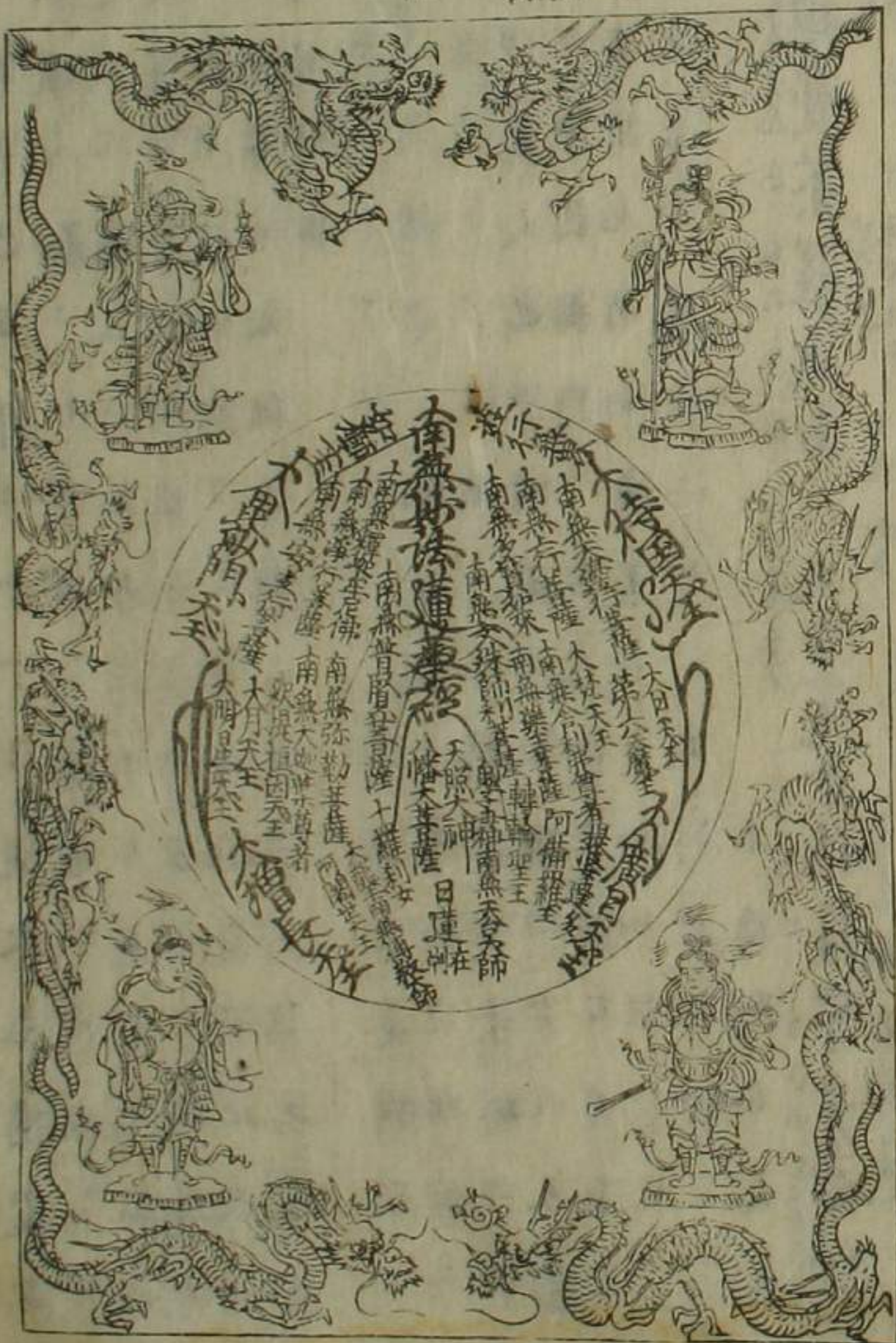
當寺は蒙古
退治の旗曼
茶羅あり



のり書しり所の日蓮上人真蹟の曼茶羅の旗あり
境内あり本山身延同射の靈像ありと云三澤流初禪の本寺なりて當寺第二世の
七面堂 住持仙龍院日宗より二百日加行して此の傍に社殿を建てたと云
日の丸旗曼茶羅 一幅

竪六尺五寸

毎歳七月十六日
より初め二日
まで虫肺とて諸
七面堂に掲て諸
人より参りて
月の丸の曼陀
羅の身延山に
あり



竪五尺五寸

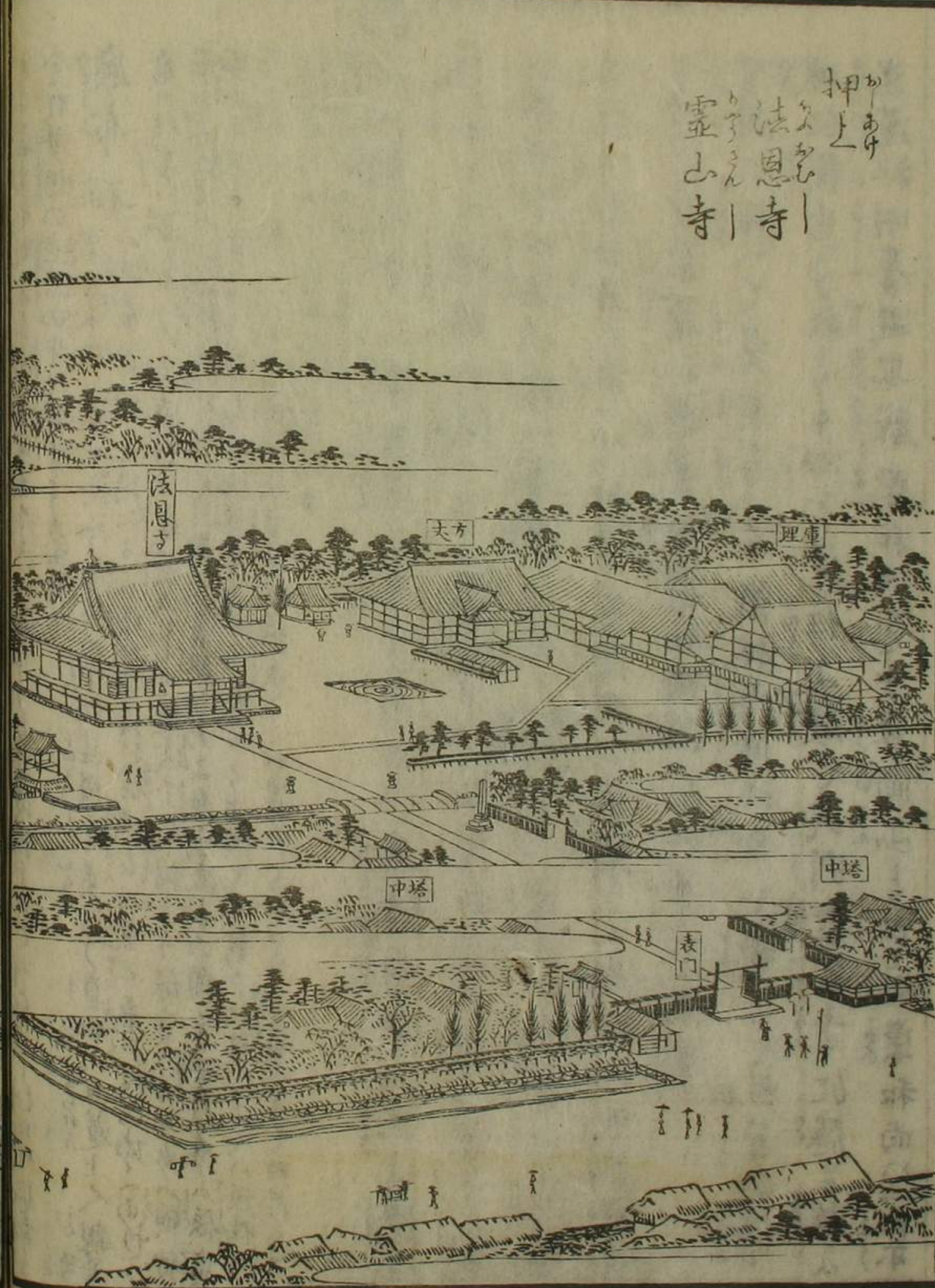
鎌倉將軍
惟康親王
蒙古夷賊
退治の図





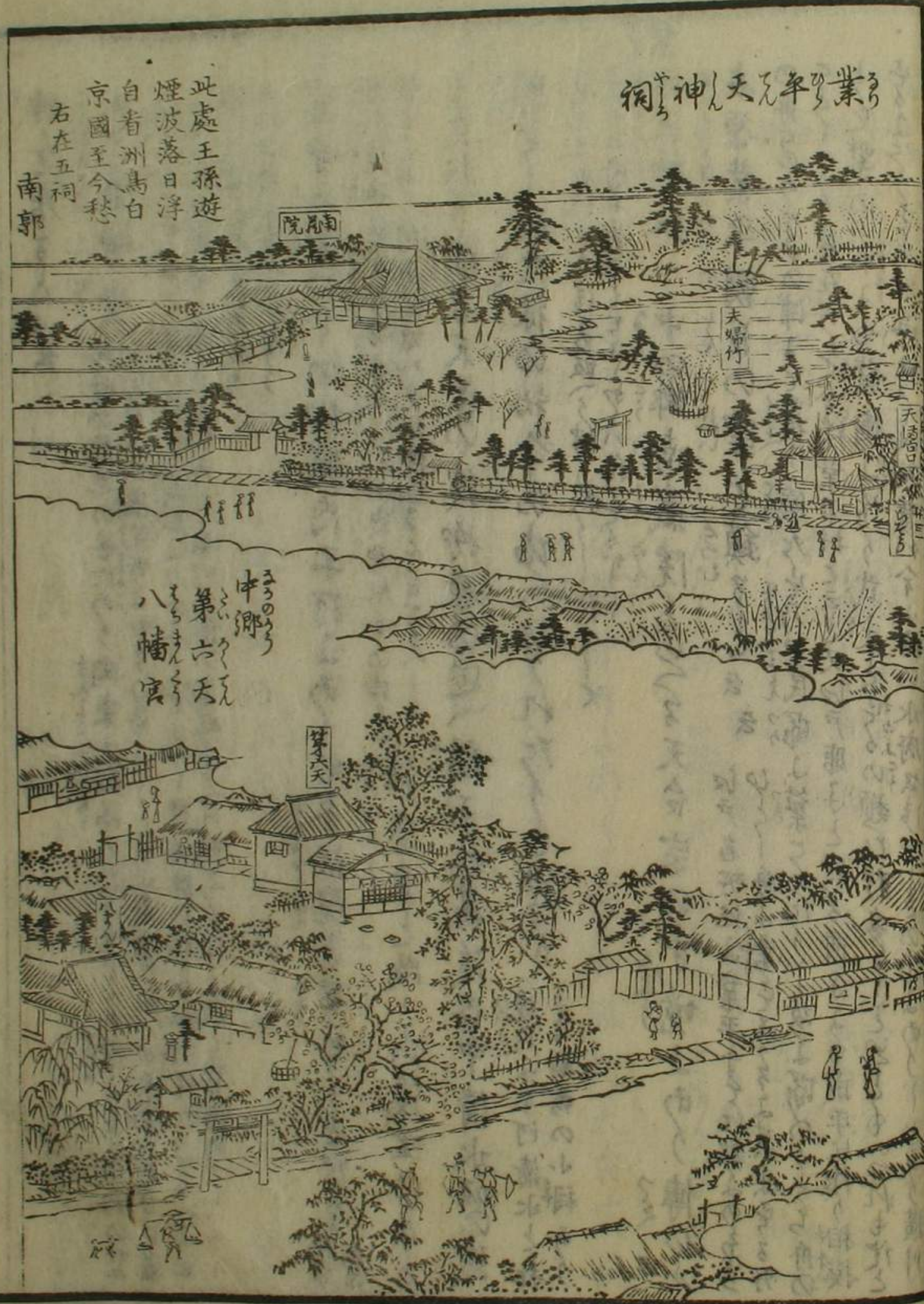


押上
法恩寺
霊山寺





の高德碩學として往生要集指麾抄を著し大に世に流行る
 當寺昔の湯嶋妻恋坂ありりり明曆火災の後浅草より
 移りしなり元禄年間今の地より移る
 知恩院尊空法親皇御廟 本堂の西にあり空親皇は保元平治の亂にありて
五本松の所居あり其故の地なり
 淨土傳燈系圖曰 尊空天蓮社帝譽号照滿伏見
 守邦親王子入于靈巖室剝漆嗣法住洛知恩院元
 禄元年十一月七日寂
 觀音堂 本堂の右の方にあり本寺の慈覺大師の作なり
掛昌一位尼公の念持佛なりといふ
 平河山法恩寺 柳嶋出村町にあり日蓮宗として花洛本國寺
 の觸頭江戸三箇寺の一負たり本堂の宗祖上人の像を安じ
 日法上人の作なり相傳の當寺の太田大和守資高 道灌の孫なり
法親の靈廟記
 先考六郎左衛門尉資康入道法恩寺 日恩寺
と号す
 十二回忌追悼の爲に田村の内を寄附し日住上人を同祖とせ
 則大永四年甲申武列江戸下平河に精舎を營建し一家の靈



此處王孫遊
 煙波落日浮
 自看洲鳥白
 京國至今愁
 右在五祠
 南郭

中洲
 第六天
 八幡宮

牌を居ると云

三十番神堂 本堂の前左の方にある関東古戦場といふ所の云傳は三十番神の堂

に資高北条家とあり里見義弘より永く豊嶋郡の地を知行せんとて見方の

記より其の今の所城内

平川の地ありなり

當寺往古の今の御城内平河よりありて本住院と号せりと云

野原役帳に本住坊寺の三田内惣所分の地を法思寺と改し後世の

階をとり刻を住持のまを云なり

とえたり遠く天心の後柳原の辺に移され其後谷中清水坂の地

轉せられ元禄の初今の地へいれたりといふ

是乃ち平河より遠く坂へ移りたりて住して

業平天神社 中の郷南藏院といふ天台宗の寺境よりあり傳ひ

在原業平朝臣の壺を鎮ると云

の舟のありの浦より覆り溺死し乃里民塚に築てあり故に塚のうら舟の

うらなり其在所を今も業平村と云ふ又戸鹿子といふ冊子より成平に作り相撲

とて紫の一本も業衡は作り武丈とて其の類ひ多しといふもこれと

なるはたてを永原亭と云ふ此祠昔の今小梅の水府公の地ありといふ横川

中郷の今といふ所を説く中の中と云ふとあれは中郷の今といふ所の

按は當社の説説紛々として洋より久南向亭の茶所より紙の三吉所の里の

神の相殿に業平の壺と菅束とを合せたりといふこれに隅田川の流連く

ては彼伊勢物語に因りてなり業平の壺を齋より菅束を勸請せりといふ

業平天神といふ祠なりといふとあり此説の如く伊勢物語を作りたるものと

ありて後世に附會せりといふなり

中郷八幡宮 同所南の方荒井町よりあり南番場町天台宗泉

龍寺奉祀と相傳ひ文明七年乙未の鎮坐なりといふ

大六天祠 同北に隣り大川階普賢寺別當なり當社も文明五年

癸巳の勸請なりと云傳ひ

多田薬師堂 同所大川階にあり玉島山明星院東江寺と

号し天台宗東叡 惣門に掲る所の玉島山の額に韓人雪月堂

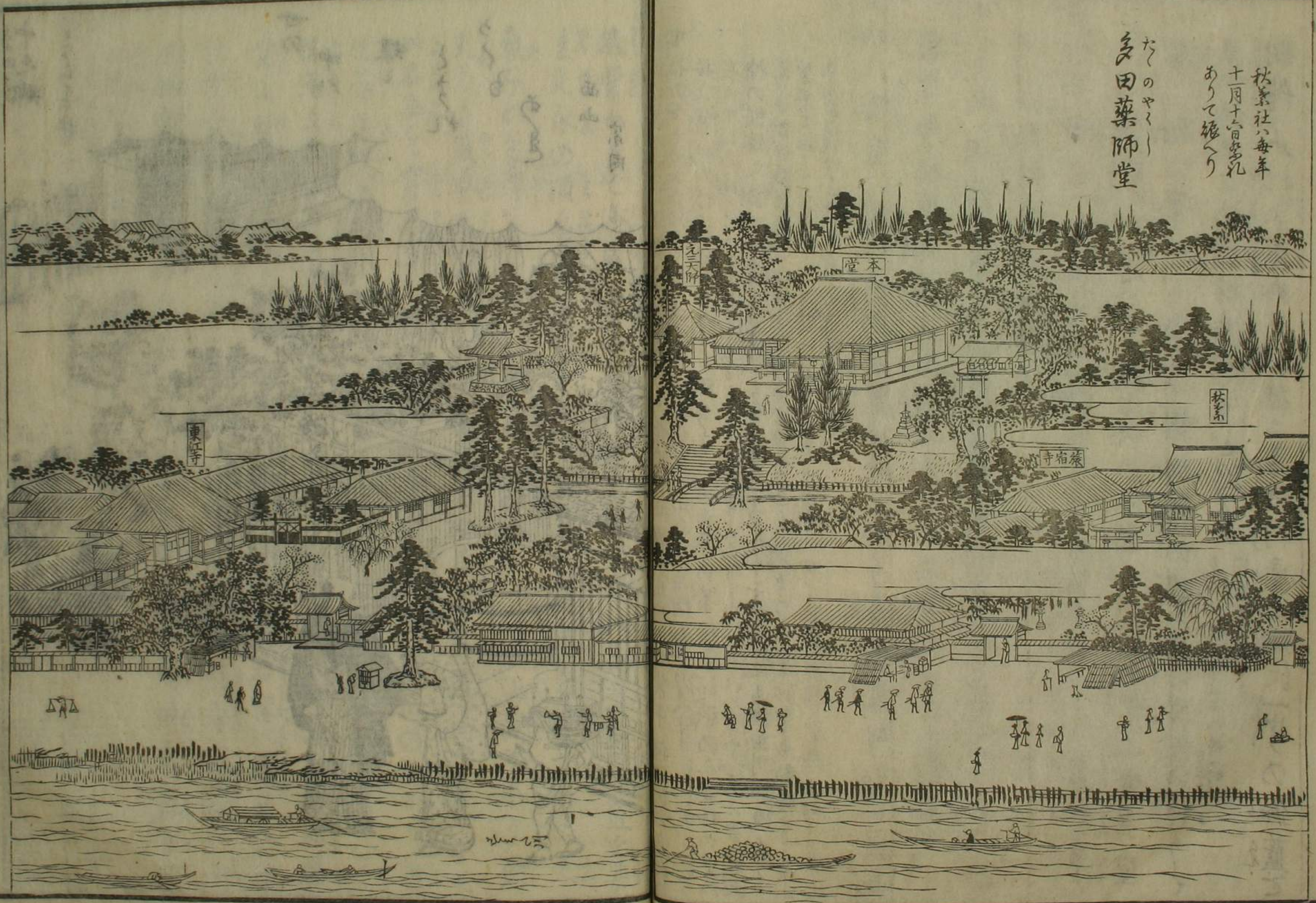
李三錫の筆なり本寺薬師佛の像に惠心僧都の作りて

多田満仲公の念持佛なりといふ

相傳ひ村上帝御宇天徳二年撰別多田郷に一字の伽藍を

秋葉社ハ毎年
十月十六日祭礼
ありて賑へり

たぐのやく
多田薬師堂



中之郷

さうりー井

世の

中の

蝶々

とまれ

うくも

あま

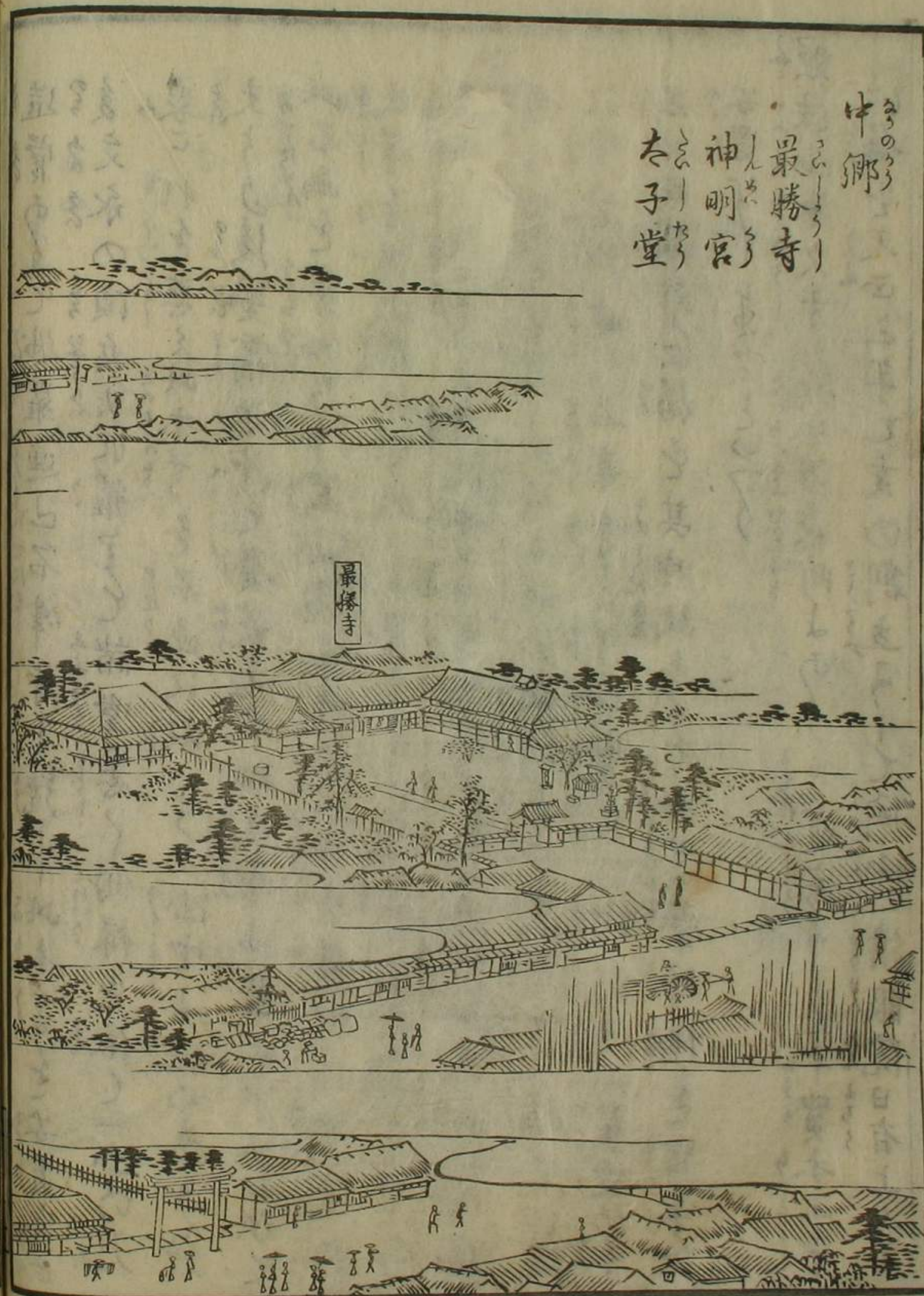
西山

家周



造管ありて沙羅連山石峰寺と號し此本寺を安置せ其
 多文永の頃兵火に罹りて諸堂悉く回祿を依て一山の太
 衆られを悲み此本寺を石函に収め山中に埋め奉り
 夫より後星霜を移り慶長元年郷民等沙羅山中にひて
 此石函を穿出り蓋し沙羅連山石峰寺薬師の銘あり郷
 民等奇異の思ひをれ一寺一宇を營て是を安と同年
 其庵主宗玄と云者に本寺を告めありて京野五條の因幡
 堂に暫く安置し又五條の橋詰東の方若宮八幡宮の辺
 に堂舎新建て石峯寺と号を寶永の頃彼寺の黄檗の千
 呆和尚深草に招て其時故ありて本寺薬師佛を當寺に
 安置せしとあり

照法山本久寺 北本所表所あり日蓮宗ありて平賀本土寺
 に属す天正三年乙亥の創立ありて岡山清眼院日有上人と



中郷
最勝寺
神明宮
石子堂

号を當寺に安置する所の宗祖大士の像は日朗所御首を彫刻
一 日法所全體を造り添られしといひ體中三寸に六寸の首
題の札を収めたり日朗のいひ日法等の真跡なりといひ
此御影始谷中感應寺に安置と元禄四年彼寺改宗の時
檀家より八枚弥宗と云ふ有信の人ありし此影像あらひに
之を天子大黒天等と其家よりつて宗教ありしと後當
寺に安置ししなりといひ境内安重の七面大明神は花洛村雲の
尼御所隨龍寺殿仕女數馬女感得の靈像なりと故ありて當寺
に安置ししなりといひ

正覺山妙源寺 同所北本所番場町にあり日蓮宗なりと下
野佐野妙顯寺は屬と建武年間草創し中老僧天目
上人用山たりといひ總門の額に正覺山の三大字は平林淳信の
筆跡なりと消日居と記しあり

牛寶山最勝寺 明王院と号し同所表町にあり天台宗なりと
東叡山は屬と本寺不勅明王の像は良辨僧都の作り當
寺は牛御前の別當寺なり貞觀二年庚辰慈覺大師草創
良本阿闍梨用山たり寛永年間 大樹 此辺津遊獵
の頃屢當寺へ 入内せられしなり其頃の假の御殿は
當寺にありしなりといひ

牛嶋神明宮 同所は並の相傳は貞觀年間の造座なりと別
當を神宮寺と稱し最勝寺より兼帶と
元禄四年伊勢大社宮内省より大光月内に御影の御声と我は土女權天の御影
元禄四年伊勢大社宮内省より大光月内に御影の御声と我は土女權天の御影
伊勢の御影を勧進ししなりといひ

同所は牛島は北条家の所領なりとありて當寺は牛島にありて
あり今も本所中の地の廻り須藤氏の所領なりとありて牛島にありて
あり

太子堂 同所は町にあり天台宗如意輪寺に安置と本寺聖徳太子

の像十六歳にありし時自親造りありと云り當寺の傳和
天皇の嘉祥年間慈覺大師東國遊化の頃の創建とて帝百
畝の水田を寄附しあり天文の頃此地税融氏の災にや
りし太子の靈像の自火焼を造り出ありて恙なかりし
に戸名所説より云り

